
FAIRY TAIL～光と闇の魔導士～

白黒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FAIRY TAIL 光と闇の魔導士

【Nコード】

N8101V

【作者名】

白黒

【あらすじ】

俺は、神様のミスで死んでしまった。だけど、お詫びに神様はFAIRYTAILの世界につれて行ってくれるらしい。さてさてどうなることやら？

ちなみに小説書くのは初めてで、よく分からないので自分ルールで書きます。

＊主人公が結構強いのがイヤってかたは移動しましょう

第0話 始まり（前書き）

はじめまして初心者で書きますけど、どうぞよろしく。

最初のほうはグダグダになるかも・・・

第0話 始まり

俺は渡辺^{わたなべ ひかる} 光^{ひかる}どこにでもいる高校1年生だ。

ある日の帰宅途中俺は信号無視して来たトラックにひかれた。
今、天国？みたいなところにいる。

「天国って本当にあったのか？つか俺死んだのか？」

「そうじゃ、お主は、わしのミスで死んでしまったのじゃ・・・」

そういいながらものすんごく髭の長いじじいが出てきた。

「わああああっ！！あんた誰？ってか髭ながっ！」

「この髭はワシのチャームポイントじゃ！ってそうじゃなくってわしは、神じゃ！」

「・・・・・・」

「何じゃ？その信じられえなあいうみたいな顔は？」

「わ、わかったよ信じてやるよ（笑）」

「・・・笑うなっ！」

「っ！俺の心が読めたのか？」

「あたりまえじゃ、わしは神じゃ」

「へ〜でその神様がなんのようですかあ〜？」

「だからいったじゃろ・・・おぬしは、わしのミスで死んでしまったのじゃ。正確に言うとな人間の書類整理中にお主の書類にコーヒーこぼしちゃったんじゃ・・・人間の書類は汚れたり、クシヤクシヤになったりすると、そいつは死んだって事になってしまふんじゃ・・・
・・・本当にすいませ「ざっけんなゴラァァァ!!」

「ぶはあ!いきなり蹴るな!せっかく謝ろうとしたのにっ!!」

「書類が汚れたたらその人間は死ぬって知ってんだったら、最初っからコーヒーなんて飲むなよ!!」

「・・・・以後きおつけま〜す・・・・」

「まったく殺しやがって・・・・もとに戻せよ!」

「・・・・それが無理なんじゃ」

「はあ?」

「いくら神様ワシでもそれは無理!まあ・・・・わしより上の神になら出来るがな・・・・」

「じゃあ呼んでこいよ!」

「神様向かってその態度は何だっ!!」

「つく……じゃあ、あなたより上の神様を呼んでください・
……」

「無理です」

「…………やっぱ舐めてるよな? (怒)」

「っちょ! ちょっと待って! さっきの蹴りは痛いからやめて!」
神様にも痛覚ってあるんだ・・」そりゃもちろん! 人間に近い体
つきをしておるからの!! それでワシ等、神様は皆人間の書類を整
理しておるんじゃ。で、忙しくてそんなことをしている場合じゃ
ないのじゃ・・それに人間を蘇生することは天界では固く禁じられ
ておる。つまりお主の蘇生は絶対に不可能!」

「何言ってるんだ? まあいいや・・・とにかく俺を蘇生しろ」

「人の話聞いてたっ!!? (あっ! ワシ人じゃない・・・)」

「…………じゃあお前どう責任取ってくれるんだよ!!」

「転生…………って知っておるか?」

「は? まあいちょう小説とか読んでもから知ってるけど・・」
転生って魂を別の世界にやるってやつだよな? 一度はやってみたい

事だねーうん、うん
・・・!!

「まさか・・・？」

「そうじゃ、お前を転生してやる!!」

「よっしゃアアアア!!」

「決定権はお前にやる。何処がいい？」

「漫画の世界とかあり？」

「もちろん」

「じゃ妖精フェアリーテイルの尻尾で！」

俺が死ぬ前まで大好きだった漫画だ。

「設定は？」

「まず名前は・・・ライトで」
まあ名前が光ひかるだからな・・・

「あと体はジェラルルの顔の赤い紋章なしで、髪の色はちょっと暗い赤い髪色で、能力は・・・光と闇の魔法で光の魔法は、スピードがあがる魔法で、闇の魔法はパワーがあがる魔法にしてくれ、

あと、ある程度修行すれば、なるべく早く強くなるようにしてくれ、時代はナツがギルドに入るくらいで、あと俺の今までの記憶を消してくれ、お金も100万Jぐらいくれ♪」

ちなみに何で体がジェラールがいいかというとフェアリーテイルのキャラの中でジェラールが好きだからです。（作者も好きです）

「うーん注文が多いなあ。まあOKにしといてやろう。」

「やった♪」

「下の名前は……ガレノフでいいかな？」

「うんOK、おーけー」

「身体能力は高めのほうがいいかね？」

「そりゃもちろん！」

「あとジェラールとかいうやつの体だといろいろそっちの世界で問題が起きるんじゃないが……」

「え！じゃあ駄目なの？」

「いいや、この神様に任せなさいっ！何とかしてみせる」

「おーさすが神様！」

「あと記憶消していいのか？」

「いいんだ、俺はフェアリーテイルの世界で生まれ変わりたいのさ！・・・つまり人生をリセットしたいってことよ。それに原作知識とかあったらつまらないだろ・・・多分」

「ふーん・・・・・・・・じゃ、転生するぞ！」

「いつでも」

「ではいてら〜」

そのとき床に急に穴が開いた。

「うわっ！」

「じゃね〜いい人生送れよ」

「もっとましな方法なかったのかー！」

そして俺の第二の人生が始まる！

第0話 始まり（後書き）

いかがでしたか？読みづらいかもしれないけどそこは・・・。

夏休みだから更新はなるべく早くするつもりです。

では・・・

第1話 旅立ち（前書き）

更新遅いとか書きましたけど結局早めに書きました。

第1話 旅立ち

「なんでなんだああああ！」

神様に転生された俺は今真っ青な高い空から落ちている。
ああ、神よ、きさまをにくむぞ。

「くっそどうすりゃいい？ うーん」

そう考えている間に・・・。

「うわ~~~~っ！！！」

地上に落ちた・・・が、運がいいことに森の木に引っかかった

「いってー！はーよかったここでまた死んだら意味ないからなあ」

そういつて木から降りる。

「ん？ポッケトになんか入ってるぞ？」

そこには神様よりと書かれた手紙があった。

「なにになに？」

『無事に着いたかな？すまないちよつとミスった（笑）
場所もちよつとずれてしまったのお』

まあそんな遠くないからいいじゃろ、ちゃんと君のご希望どうりに
してやったぞ
じゃがんばれ。』

「ちゃんとやれよ、くそじじい！！（怒）」

俺は怒りあまって神様からの手紙を思いっきり地面にたたきつける

神様あいっまたミスったのかよ！！ムカつく神様だなオイ……

「つたく、それにここ何処だよ？」

ズシンズシン

「ん？」

「グオオオオオ！」

「でかつ！」

そこにはくそデカイ角つけた化けモンがいた・・・。

「うわっマジかって、こっち来た〜！」

ズシンズシンズシン

「売られたケンカは買わねば・・・」

そういつて俺は拳に力を込めて、闇の魔法をイメージした・・・。

闇の魔法・・・闇の魔法・・・

すると拳に闇の魔法らしき物が宿った

よしっ！出来たぜ！！やっぱり人間危ない目に合うとすごい力が出るんだな・・・たったの数秒で魔法マスターしちゃったよ・・・
・よく考えたらこの世界始めての魔法だな。

「いくぞ！」

「グオオオオオ！」

そして俺は化けモンの頭を思い切り殴った。
すると・・・？

「ぐわあああすんげエいてー！！！」

けど痛かったのは俺だけじゃない

「ギャオオオオオン！！！」

そう化けモンは叫ぶと

ボタン

化けモンは倒れた。

「よし、倒したな？」

「……あれ？よく考えたらまだ、記憶あるし……それに、
これ年齢変わってないな……」

神よフザケンなよ……

どんだけミスってんだよ……

もう神様失格だろこれ

さてこれからどうするか？

とりあえずギルドにいくか？？でもどっちの方角だ？？？

「ん？急に……眠気が……」

ボタン

その場に少年は倒れた

少年の近くには先ほどの神の手紙が落ちていた
どうやら手紙は2枚あったらしい・・・

『あ、あと記憶消すのと年齢を変えるの忘れてしもた・・・
だから、10分後にはお主を眠らせて設定しなおすからよろしく
＊この手紙は10分後には消えます。』

10分後

「う・・・うん？ここは？俺は何していたんだ？頭が痛い。あれ？まさか記憶喪失？

『ライト・ガレノフ』・・・うん！ちゃんと自分の名前覚えてんな。でも、なんかおかしいぞ？俺何してたたんだろ？」

「おいっ！」「えゝこれなんかこれ変な記憶喪失だぞ。思い出せ・・・思い出せ・・・」おい貴様聞こえているのか？」

「へ？」

声のするほうを振り向くとそこには赤髪の鎧を着た女の子が立っていた。

「あんたどちら様？」

第1話 旅立ち（後書き）

次からはいよいよ主人公がギルドに入ります。

・
・
・
・
・
多分

第2話 私たちのギルド（前書き）

更新早いのはきつと最初のほうだからだと思います

後のほうになるときつと遅くなるかも・・・。

ではどうぞ

第2話 私たちのギルド

「あんたどちら様？」

「私か？私はエルザ・スカーレットだ」

「俺は、ライト・ガレノフだ」

「で、貴様……じゃなくてライトはここで何をしていたんだ？」

何をもって言われてもなあ」

「えーっと」

「ここは強いモンスターがいるところだ！何でこんなところで寝そべっていたんだ？」

「……こんなところに女の子がいるのもおかしいと思うけどなあ？」

「わ、私はいいのだにかく！何でこんなところで寝ていた？」

はく口うるさい女だなあまったくしょうがない本当のことを話そう・

「実は……記憶がないんだ」

「そんな嘘は通用するか！」

そういいながら女はエルザ剣を俺に突き立てた

「お、おい俺の目をよく見ろ！俺が嘘をついてると思うか？」

「……いいだろう信じてやろうだが、詳しく話を聞かせてもらうぞ？」

詳しくって言われてもそんな話すことないのになあ……

「俺が目が覚めたら自分の名前と自分が魔法を使えること以外全部忘れてたんだ……」

「魔法？お前魔法が使えるのか（その平和ぼけた顔して）」

「うん、なんか口じゃ説明しにく」「じゃあ私たちのギルドフェアリーテイルに来ないか？」

「私たちのギルド？」

「とりあえず、ギルドに向かいながら話そう。ここじゃ危険すぎるからな」

そして今俺とエルザはギルドマグノリアに向かっている。

「私は、妖精フェアリーの尻尾の魔導士なんだ」

「ヘーエルザも魔法つかえんだ・・・」

「うむ、騎士ザ・ナイトという魔法をつかうのだ」

「なんかかっこいいな（小さな声で）」

「ん？なんか言ったか？」

「いいや何も？」

「それよりお前の魔法に興味があるのだが？ちょっと見せてくれな
いか？」

「えーだって口じゃ説明しにくいもん」

「・・・まあいいどうせ魔法を見せなくてはならなくなるからな」

え・・・何それどういうことだ？

「ほら！見えてきたあれがマグノリアだ！」

そこにはとても大きな町があった
とにかく大きい・・・

「さあ早く行くぞ！」

「あ、うん」

「あ、そうだライト」

「うん？」

「お前お金とかあるのか？」

「ん・・・ちょっと待って」

ポケットに手をつ突っ込んでみると・・・

「お！財布だ中身はいくらかな♪」

財布の中を見ると中にはたくさん札束が入っていた。

「おうたくさん持っているじゃないか。100万Jぐらいあるんじゃないか？」

（いいなあうらやましい・・・）

「ねえエルザ？近くにさあ武器屋とかない？」

「あるぞ」

「じゃあちよつと付き合ってくれない？」

「なんか買うのか？」

「まあ俺の魔法じゃ、きっと戦闘能力低いし・・・」

「よし！じゃ早速買いに行こう！」

「うわっちよつと手ひっぱんって！」

はい、いま早速武器屋につきました。今武器選んでいます。

「どれにしようかなあ？」

「やっぱりこれだろ？」

そういつてエルザは剣を取り出した。

「いやあ〜それじゃエルザとキャラかぶっちゃうだろー」

「そ、そうか・・・」

「じゃお客さんこれならキャラかぶらないですよ〜」

なんだかどっかで見たことあるような店主が出したのは木刀だった。

「ん？お！これいいじゃん。でもすぐ折れそうじゃね？」

「そういうかと思ひまして、なんと今なら木刀＋強度を高める魔導書＋書をお付けします！」

「「・・・」」

「じゃ、じゃあ特別になんと！木刀＋強度を高める魔導書＋切れ味を付けることができる魔導書もセットにしちゃいます！」

「うん、まあそれなら買ってやるよで、何J？」

「特別な素材を使っているんで2万Jになりまあ〜す。」

「まあ高いけどいっぱい金あっからいいや」

「まいど」

強度を高めるほうの魔導書は魔導書をつかった物に永久的な効果があるらしい

切れ味を付けることができる魔導書も1度、魔導書使うと永久的な効果で、心で切れ味がつくようにイメージしてある程度の魔法が触れれば切れ味が出て、切れ味解除のときは心でイメージすれば解除されるらしい。

早速魔導書を使って木刀を強化した。（使い方が分からず30分かった）魔法書を使うと魔法書が消えた。

その後1時間ぐらいエルザと少し剣術の特訓をした。すると驚くことに短時間で俺は強くなった！

「ハアハア疲れた・・・もういいだろ」

「しかし驚いたなあ。こんなわずかしか特訓してないのにこんなに強くなるとは。お前はもしかしたら昔剣術を習ってたのかもしれないな」

「さあな、全く覚えてないけどな？それより・・・」

「ん？」

「魔法書って使い捨てなの？」

「いや・・・普通、使い捨てじゃないな」

「じゃあ、あのおっさんぼったくりじゃなか！」

「とにかく時間かかりすぎだ。早くギルドに行くぞ！」

「へいへい」

俺はさっき買ったばかりの木刀を左の腰に差した

どうやらギルドはかなり近かったみたいで2分でついた。

「ここが魔導士ギルドフェアリーテイルだ！」

「おう！ずいぶんデカイですなあ！」

そこにはかなり大きい建物があった

FAIRY TAIL としっかり看板に書いてある。

第2話 私たちのギルド（後書き）

結局ギルドはいる前でやめました

長くなりすぎたからです。

次回こそギルドに入って・・・？

第3話 ギルドに入ったらまずすることは？ (前書き)

夏休み中どんどん更新します

とにかく頑張ります！出来るだけ・・・

第3話 ギルドに入ったらまずすることは？

「さあ早く中へ入ろうか？」

「あ、うん。」

大きな扉を開けると、大人たちが酒を飲んでいたり俺と同じ年ぐらいのこどもがぺちやくちや喋ってた。

するといきなり桜色の髪色でマフラーをつけた少年がこっちに来た。

「エルザ！俺と勝負しろ！」

「今忙しいんだそこをどけ！」

「は、はい」

え、エルザって怖がられてんの？
確かに剣持ってて危ないけど・・・

「マスターただいま戻りました。」

そこには、かなり小さいおじさんがカウンターの上に座っていた。
いすに座ればいいのに・・・。

「うむ。ん？エルザその子は？」

「こいつは、仕事の帰りに・・・自己紹介しろ」

「うん。俺はライト・ガレノフです。このギルドに入れてください。
」

「うむ。勿論OKじゃ。」

俺がマスターと話してるとさっきの桜髪の少年が俺に話しかけてきた。

「おい！そこのお前！」

「何だ俺はそこのお前さんじゃないぞ」

「・・・じゃライトとかいうやつ！俺と勝負しろ！」

おいおいこいつナツとか言うのか？こいつは戦うことしか頭にないのか？

「ナツ、今ライトはマスターと話ているんだ！」

「いや、エルザ、こいつの^{ライト}実力の知りたいし、いい機会だ。
ライト! 「はいっ」お前ナツと戦ってみろ!」

「まあマスターがそういうなら・・・」

えゝエルザとめてくれないのかよ!

「マジかよ・・・」

「しゃー! 燃えてきたぞ!」

というわけでなぜかナツと戦うことになりました。
しかも、ギャラリーもいます。何でギルドに入って早々戦わなくてはならないんだ?

横で賭けとかやってるし

「こいつ、だいじょうぶか? なんか弱そうだぜ?」

「俺ナツに賭けよ」

「ナツもそこそ強くなったからなあ多分あの新人り負けんな」

ギャラリーが俺が負けるとか言ってやがるしほとんどのヤツ、ナツに賭けてるし

あーマジむかつく！ナツ倒して度肝抜かせてやるぞ。

「ナツお前強いのか？」

「あーそうだ俺は強いぞ！グレイより・・・」

「何だこのくそ炎！」

遠くで何か言ってるやつがいる
ナツは火の魔導士なのかな？

「かかってこいや！」

「いや君に先攻譲るよ」

マスターが何かぶつぶつ言ってる

「ライトの目がかわった・・・」

「じっちゃん早くしてくれ！」

「おおすまん、すまんでは、始めい！」

「いくぞお！火竜の鉄拳！」

ドンッ！

その場に砂ぼこりが舞う

「あゝあやっぱだめじゃんよわいなあ」

「つまんねーもう終わりかよ」

そう言い捨てて帰ろうとするギャラリーもいた

やがて砂ぼこりが晴れるとそこには・・・

「おいおい何が終わりだって？」

『！！！！！』

「まだ始まったばかりじゃないか勝手に終わらすなよ・・・」

「おいっ！嘘だろ？ナツの拳を素手で受け止めてやがんど！」

ザワザワザワ

「くそ！思いっきり殴ったのに！」

「今度は、俺の番だ！」

「消えた？どこ行きやがった！」

「後ろだよ」

「！！！」

軽くナツの首に手刀するとナツは倒れた

ドタン

「しょ、勝者ライト！」

「あ、あの新人、ナツのこと倒しやがった」

「す、すげえー！」

『おおおおおおお！！！！』

「う！うるさい！耳が・・・」

「おめえーみかけによらず強いじゃねえかー！」

「痛い痛いやめろって！」

ライトの周りに一斉にギャラリーが集まり
ライトの髪の毛をぐしゃぐしゃしたりもうめちやくちやる。

「「おい！」」

「ん？」

ギャラリーがやたら静かになる・・・

「「お前、俺と（私と）勝負しろ！」」

なんでだぁーーーーー！！！！

「俺が先だ！」

「私が先よ！」

「いいや私だ！」

うわぁーどうしようめんどーなことになっちまったなあ・・・

あ、いいやもめてる最中に逃げようつと。

「よくお前強いなあ！あ、俺グレイっていうんだよろしく」

「えっあ、うんよろしく。」

軽く握手を交わす

そうしている合間に・・・

「おいグレイまさかお前、俺より先にこいつと戦おうってのか！」
ライト

「いや俺はただ自己紹介してただけなんだけど・・・」

「ならいい・・・」

グレイー！ー！てめーのせいで見つかったじゃないか！

「おい！お前に決めてもらおうぞ！」

「ちょ待て！まだ誰も戦うなんて・・・」

「いいから早く！」

「ちくしょーグレイふざけんなあ！！！」

「ん？なんか誰か俺のこと呼んだかな？」

「「「さあ！誰と戦う！？」「」」

「俺あんたらの名前知らないんだけど・・・」

「俺はラクサスだ！」

「私はミラジェーン！呼びにくかったらミラでもいいぞ！」

「私の名前は知っているな？けど改めて言わせてもらおう！私はエルザだ！」

「でなに？俺に戦う相手を決めろと・・・」

「「「そう！」「」」

「じゃ面倒だから皆と順番で戦ってやるよ。（てか、なんでエルザまで）」

「「「じゃあ順番は？」「」」

「じゃ、ジャンケンで決めろよ」

「「「ジャンケンポイ！」「」」

順番がどうやら決まったそうだ

1番 ミラ

2番 エルザ

3番 ラクサス

それでギルド前じゃ危険だから近くの離島で戦えとマスターに言われた。

そして今ミラと戦いが始まろうとしている！

第3話 ギルドに入ったらまずすることは？（後書き）

ミラは書くのが難しい・・・です

第4話 最強の3人（前編）（前書き）

今日や昨日と違ってやる気があります。なぜなら、お気に入りに入れてくれた人がいたからです。ありがとうございますっ！

でも、なんかいろいろ問題あって今日は昨日みたいに3つ投稿無理です。

ではどうぞ

第4話 最強の3人(前編)

はい、今ミラと戦うところです。やべえよ向こうめっちゃやる気だよ・・・

しかもこの後エルザと戦うのかーめんどえ・・・

ラクサスとエルザそんな近くで座ってみてたらアブナイぞ・・・

「早く始めるぞ！」

「はいはい始めますか」

するとミラの姿が変わった

「なにそれ？」

「サタンソウルさ！」

悪魔か・・・おっかねー

「じゃあ先攻は「先攻は譲ってやる」・・・うん分かった」

俺は腰にさしていた木刀を出した

「は？そんなモンで戦うのか？」

「大丈夫、ちゃんと強化してあるから」

そういうと俺は木刀に魔力をこめる

シャキーン

「これで切れ味がついたぞ」

「本当か？何にも変わってないぞ？」

「じゃ試しにこの木を切ってやるよ（てかこれちゃんと切れるよなあ？）」

ブンッ

ズドン！

良かったちゃんと切れた・・・

「ほーほんとに切れたな」

「それじゃ始めようか。いくぞっ！」

「こい」

「うりやあ！」

俺はミラに向かっていった

「(早い!) くっ！」

ブン ブン ブン

ミラはぎりぎりかわす

「なかなかやるなあ」

「そちらこそ」

ミラは、俺と距離をとる

「じゃあ今度は私が！」

ミラは俺の目の前に一瞬でやってくる

「ぬお！」

「オラオラ！」

ミラがグーで何回も殴ってくる

「危なっ」

「（何？あたらないだと？こいつ強い！）」

「さて、そろそろ終わりにしますか・・・」

俺はミラの後ろに瞬間移動した

「何！？いつの間に？」

俺はミラの首に木刀をかざす

「はい、終わりね？」

「くそ・・・負けた・・・」

ミラはその場にしゃがみ込んでしまった。

「どうした？そんなにショックだったのか？」

見るとミラは少し涙目になっていた。

「い、いやゝミラ強かったぞー。特にあのパンチとか」

「本当？」

「うんうん」

そっぴいながら俺はミラの頭をなでる

「な、なでるな」

「おっとわるいわるい。ん？どうした顔が赤いぞ、急病か!？」

「ち、違う!」

軽く殴られる
でもちよつと痛い

「よし、良かった、じゃあほら次のお客さんが待ってるから」

「う、うん・・・」

ミラはエルザの横を通り過ぎると

「なんだあ？ミラまさか惚れたのか？（小さな声で）」

「そ、そんなんじゃない！」

「どうしたエルザ？なんかあったのか？」

「いいやなんでもない。とにかく始めようじゃないか！」

「やっぱやんなきゃだめか・・・」

「あたりまえだっ！」

「じゃ始めましょうか」

「ああ！」

するとエルザの姿が変わった。あれ？ミラと同じ？
かと思っただけなんかい。すごい鎧に変わってた

「てんりんのよろい
天輪の鎧だ」

「かっこいいな」

「そ、そうか？先攻はもうぞ」

「うん、かかってこい！」

「いくぞっ！」

第4話 最強の3人（前編）（後書き）

はい、もう疲れました。何時間も考えてたから・・・。
きょうはこれでやめようかと思います

次回ライトの魔法が明らかに！

第5話 最強の3人（後編）（前書き）

本当は昨日更新するつもりだったんですけど、いろいろトラブルがあって・・・

もしかしたら今後更新スピードが落ちるかもしれません。

でも、作者はできるだけ頑張ります。

では、どうぞ

第5話 最強の3人（後編）

ミラには勝ったけど今度はエルザか・・・

「いくぞっ！」

「ん？おう、かかって来い」

俺は身構えるとエルザは飛んだ

「え、飛べんの？」

「食らえ！循環サークル・ソードの剣！」

「なにこれ？あぶっ！」

ガキイイイーン
ギギギギギ

「何？私の攻撃を受け止めているのか？」

「流石にこれはきついな・・・」

「ん？何だヤツの木刀から黒い魔法が」

「うらぁ！」

ガキーン

「何！？ならこれならどうだ？舞え！剣たちよ！」

すると俺の方に無数の剣が飛んで来た

「もう次から次へと・・・」

キン キン ガキン

少し体に剣がかする

「数が多すぎる！なら・・・」

「ん？今度は、白い魔法か！」

「うおおおおおっ！」

「（早い！！）やっとお前の魔法が分かったぞ」

「ん？」

キン ガキン キン

「お前は白と黒の魔法を使うのだな？白い魔法はスピードを上げる魔法で黒い魔法はパワーを上げる魔法だな？（別に説明しにくくないじゃないか！）」

「いいや、正確には光と闇の魔法だ！」

「（流石に疲れたな。そうだ！）」

「闇の盾！」
ダークシールド

「何？形を持つこともできるのか！」

「お！これ使えるじゃん！」

「ならばっ！」

「ん？攻撃が止まった？」

「はあああつ！」

ガン！

ピキッ

「うおっ！俺の闇の盾にヒビを入れるとは」

「これは黒羽くろはのよういの鎧、一撃の攻撃力をあげる鎧だ」

「じゃ俺も」

「とうっ！」

「はあああつ！」

ガキーン ガキーン

「（そろそろ終わりにするか）うおおおおお！！！」

ガキーン

エルザの剣の刃は切れてしまった

「何？私の剣が・・・」

「もう・・・終わりだな？」

「ま、まだだっ！」

エルザは近くにあった剣を取った

「おいおいまだやんのかよ・・・」

「はああああっ！！！」

俺は素早くエルザの攻撃をかわした。

「（かわされた！やばいっ！斬られ・・・）」

ザンッ！

エルザは10mぐらい吹っ飛んだ

「ぐわああ！くそ・・・あれ？斬られてない」

「みねうちだから大丈夫。いくらなんでも仲間なんだから斬りはしないさ」

「っ！！まだ私は戦えるぞっ！」

エルザが抵抗しそうだったからエルザに馬乗りになって木刀を首にかざした

「ハイ、じゃあこれで終わり」

「（か、顔が近い！／／／／／）わ、私の負けだ」

「ほら、立てる？」

「あ、ありがとう」

俺がエルザに手を伸ばすと・・・

バチバチバチッ！

「ん？何の音だ？うお！！」

「きゃあっ！」

ドカーン

その場に砂ぼこりがまう・・・

「何時までもちんたらちんたら戦ってんじゃねえーよ！俺は戦いたくてうずうずしてるんだよ！」

やがて砂ぼこりが晴れる

「お？やられちゃったのか？」

「あぶねえだろうが！」

「何？何時の間に！ぐわあ」

ドゴーン

俺はラクサスを蹴ってやった

「ん？私はいったい？」

「お、エルザ気がついたか？エルザ、ミラをつれてギルドに戻ってくれ、ここは危ない」

「な、何でだ？「頼む、君たちを傷つけない」・・・わ、わかった」

「でも・・・「ん？」絶対に負けるなよっ！」

「うん、わかった」

エルザは走っていった・・・

「てんめえちよつと痛いじゃねえか・・・」

「お前こそ、危ないじゃないかっ！いきなり攻撃しやがって」

「当たってねえんだからいいだろ！」

バチィ！

ラクサスはまたいきなり攻撃してきた。本当、懲りない男だな・・・

「まったく口で言っても分からないようだな（というか雷様ですか？こいつは？）」

「さあ早く始めようぜ！」

その頃エルザとミラが乗った船では・・・

「エルザまさかあんたも、ライトに惚れたんじゃないか？」

「そ、そんな訳無いだろうっ！というか今ミラあんたもって言ったよな？（ニヤリ）」

「な！そ、そんな事言っていないっ！」

第5話 最強の3人（後編）（後書き）

次回ついにラクサスと勝負です！

次の更新少し遅れるかも・・・

第6話 滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）（前書き）

どうも

作者は夏休みの宿題がまだ残ってるので少し更新遅くなるかもしれませんが。

あと原作前の話をどの辺まで続けるか迷いましたが、少し話をいくつか入れて原作に入ろうと思っています

ではどうぞ

第6話 滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）

「さあ早く始めようぜ！」

「いくぞっ！」

素早くラクサスの前までいった

「うおおおおお！！！」

ブン ブン ブンブン

「おっと、そんなんじゃないあ、当たらねえぞ！」

「どうかなあ？」

「何！何時の間にっ！」

「おりゃあああ！」

ズバンッ!

ラクサスはたいしてダメージがないようだ・・・

「そんなんじやあ俺はやれねえよ」

「どんだけお前の体は丈夫なんだよ・・・」

「オラアアアアア!」

「(何!こいつも早いっ!)」

何とかラクサスのパンチはかわすが何発か当たってしまう

「どうした?お前はそんなモンか?」

バチバチッ

「オラア!」

ラクサスの強烈なパンチが当たってしまった。

「うぐっ！」

ドーン

「まだまだ レイジングボルト！」

バチバチバチ

ドゴーン

「はっはっはっどうだ見たか！」

「いててて、畜生少しかすっちゃまったよ・・・」

「何!？」

「お前はかなり強いようだな」

「お前も本当に強いようだな。ふっふっふよしここにはお前以外いないからな。お前には特別に見せてやるよ・・・俺の本当の力を！」

「何だそりゃ？」

バチィ バチィ バチバチバチッ！

「何だ何だ？ラクサスの体が雷に包まれていく・・・」

「雷竜の咆哮！」

「何！？その魔法は・・・」

バチバチバチ

ドッカーン

先ほどの攻撃より大きな音がした

「これもろに攻撃当たってたらやばかったかもな・・・」

「!!!!」

「この魔法はナツと同じ魔法だな？」

「そうだ、俺は滅竜魔導士だ」
ドラゴンスレイヤー

「ドラゴンスレイヤーか・・・なんかやばそうだな。そろそろ俺もちょっと本気を出すか・・・」

「やっと本気か・・・!!!!!!」

俺は脚に光の魔法を木刀に闇の魔法を宿した

「いや本気じゃなくてちょっと本気だよ」

「なめやがってっ!」

ラクサスが攻撃してきたが余裕で、かわす

「(何? さっきより早いのか!)」

「食らえっ! 闇の波動!」

「ぐわああ!」

ラクサスに木刀から放った闇の波動を当てるとかなり吹っ飛んだ

「くそっまだだ!!」

「雷竜の・・・」

バチバチバチ

「ん? さっきよりやばそうだ!」

「咆哮ー!」

案の定先ほどより大きいブレスが来た

「ウオオオオオッ!」

俺はラクサスのブレスを闇の波動で対抗した

黄色い光と黒い光がぶつかる

ドッカーーン

かなり大きな音がした

「ハアハアハアこれで・・・ヤツも・・・やられたろ・・・」

砂ぼこりが晴れると

「ふう危なかった」

「何！！！何故俺の攻撃を食らって立っていられる！！」

「さあ？そろそろ終いだ！」

「くっ！」

また、さっきのようにラクサスの目の前までいった

「うおおおおお！」

「ぐっぐっぐっぐっ」

光の魔法で何度も殴る

「らあああ！」

「ぐわあああああ！」

闇の魔法で思いっきり殴った

するとラクサスは10mぐらいは吹っ飛んだ

「やっと終わった」

「・・・・・・・・まだだ」

「ん？」

「まだ終わってねえ！！雷竜方天戟！」

「うおまだやんのか！（木刀じゃあ、間に合わないっ！）」

「くっこうなったら素手で・・・・ウオオオオオオオオオオ！」

素手に闇の魔力をありったけ込めてラクサスの技を殴った

バチバチィ

ドッカーーーーン

今までで一番大きな音がした

「ハアハアくそ・・・右手が痺れちまった。ラクサスは・・・もう戦えないみたいだな」

「とにかく勝った」

戦っている間に夕方になってしまったみたいだ。太陽がオレンジ色に染まっている

「さあラクスス連れてギルドに戻りますか」

ギルド前

「あれ？マスター何してるんですか？」

「ん？おおライトか戻ったのか・・・で勝ったのか？」

「はい、まあ一様・・・」

「おい、もう下ろせ」

「あ、ラクサス起きたのか」

「ラクサス派手にやられたのお」

「どうでもいいだろ・・・おいっ！ライト」

「ん？何だ？」

「今度勝負するときは負けねえからな！」

「・・・ああ」

「おいラクサス何処へいくんじゃ」

「・・・病院だ」

「そうか・・・」

ラクサスは足早に何処かへ行ってしまった

「ライトお主は病院に行かなくていいのか？」

「はい、まあそんないした怪我はないので」

「ほら中へ入りなさい。皆待ってるぞ」

「はい」

マスターに言われた通りギルドの扉を開けると

『ようこそ!! フェアリーテイルへ!!!』

パン パン

「うお? 何だ?」

「お前すげーな! あの3人に勝っちまうなんて」

「あ! グレイお前のせいで俺は・・・」

「「ライトー!!!」」

「ん? うわっ!」

「勝ったのか!」

「やっぱ凄いなあお前は」

「こら抱きつくな! ってか何やってんのこれ?」

俺が聞くとナツとグレイが急に出てきて

「「ライトがギルドに入ったことを祝ってのパーティーだ!」」

「真似すんなよこのクソ炎!!」

「やんのかア? 変態野郎!!」

「ナツとグレイっていつもこうなのか?」

「やめんか二人とも!!」

「「・・・」」

「つかエルザとミラは離れろ! ちょっとキズとかあるから痛いんだよ」

「あ、ごめん」

「わ、わるかった」

「ゴホオン、えーそれではライトがギルドに入ったことを祝って」

『乾杯ー!ー!』

その後パーティーはしばらく続いたギルドのほとんどの人たちと仲良くなった。

ある程度落ち着いたころ

「マスター俺の住むところでしたらいいですかね？」

「ん？それなら最近出来た寮があるぞ」

「本当ですか？じゃあそこにします」

「でも少し高いぞー10万Jじゃ！払えるか？」

「大丈夫です！払えます」

すぐにマスターに渡したらマスターが少し驚いた顔をしていた。
すぐに出すのはまづかったかな？

「うむ確かに受けとった。じゃあこれが鍵じゃ。今日はもう帰った
ほうが良いじゃろ。今日はいろいろありすぎたろ」

「はい、じゃあ帰らせていただきます」

「おい、もう帰んのか？もう少し飲んでこうぜ」

「いや・・・ナツもう俺、疲れたんだよ帰らせてくれ・・・それに
また明日来るからさ」

「ん？そうか？じゃまた明日！！」

「うんまた明日！」

俺はギルドから少し歩いて自分の新家についた

「結構いい部屋じゃないか。家具もそこそこそろってるし良かった♪日当たりも良いし最高ー!!」

そういいながら俺はベットについた

「もう疲れたから寝よ・・・」

今日一日でいろんな事あったなあ
というか自分は何なんだ？まいつか

俺は深い眠りについた・・・

第6話 滅竜魔導士（ドラゴンスレイヤー）（後書き）

かなり書くのに時間がかかりました結構疲れました

次回はライトが初仕事につ！

第7話 ライト初仕事！（前書き）

もしかしたら第10話あたりで原作突入するかもしれません

少年時代を書くのが難しいからですね・・・

ではどうぞ

第7話 ライト初仕事！

「ん・・・もう朝か？」

既に太陽が出ている朝の8時だ。
まだ眠いがとりあえずギルドへいこう

早速ギルド前に着いた。寮とギルドはさほど遠くないのだ
ギルドの扉を開けるとエルザとミラが喧嘩をしていた。
喧嘩を止めないのかって？ いやいやあれは止められないよ。
もう二人ともなんかやばいオーラ出してるからね。とりあえずスルー
真っ先にマスターのところへ行った

「マスターおはようございます」

「ZZZ ZZZ はっ！ん？ おおライトか！おはよう。よく寝れたか？」

「はい、まあ」

「そうだライトのギルドマークをつけないとな」

「何ですかそれ？」

「周りのやつ等を良く見てみなされ皆体のどこかにギルドのマークをつけておるじゃろ？」

それはフェアリーテイルのギルドの一員であることの証拠じゃ！とにかくどこにギルドマークを付けるかな？」

「色とかも決められるんですか？」

「もちろんじゃ」

「じゃあ色は・・・赤で・・・右腕につけます」

「ふむじゃあここに押すのじゃな？」

「はい」

ポッ

「これでお主はフェアリーテイルの魔導士じゃ」

「よしっ！じゃあ早速仕事とやらに行きますか」

「おお早速仕事に行くのか・・・ならこれに行って来てほしい」

「ん？東の森の森バルカンのボスを倒してほしい・・・？」

「まあ本当はギルドに入ったばかりの魔導士には行かせないのじゃがライトは強いからこの仕事に行ってきてくれ。お主の力ならそんなに難しいクエストではなからう・・・。この仕事の依頼人はまあ知り合いでな、森が荒らされたりして困っているそうじゃ今日早速行ってきてくれ！ライトは初めて仕事だからのお誰か一緒に行くといい」

「ハイわかりました」

俺はマスターに言われた通り誰かを誘って行こうかなあと荷物をまとめて考えていた
誰誘っていいかなあゝナツは何処かなあ？

「ん？ナツならさっきどっか出かけていったぞ」

なんだ、じゃあグレイは何処かな？

「グレイなら朝早くから仕事行ったわよ」

んーじゃあエルザは・・・取り込み中か。ならミラは・・・そうか
ミラも取り込み中か。

その後誰と行こうかと考えていたけど結局一緒に行く人が決まらなかった・・・くそっ何で何だ？神のいたずらか？

「マスター・・・・・・・・俺一人で行きますわ・・・」

「そうか・・・まあ気をつけてな」

俺は一人で仕事へ行った
悲しい・・・

場所はここからそんなに遠くないようだゆっくり歩いて10分ぐらいでついた

早速依頼主の家に着いた。ってかなんか木の家？

「どうも仕事を受けたライト・ガレノフです」

「ん？ああ森バルカンの仕事の・・・私はポーリユシカだ」

「どうも」

「とにかく森バルカンのボスが森を荒らして困ってるんだよ。しかも群を作ってしまったみたいだね。普通、森バルカンは群を作らないけどね・・・額に傷があるヤツが森バルカンのボスだ成功報酬は5万J払う、とにかく私は人間が嫌いなんだとつといてくれ！」

「は、はいわかりま「早く行っておいで！」はいっ！」

なんかポーリユシカさんって恐いなあ。あ！森バルカンがどんなやつか聞くの忘れた
ま、きつとサルかゴリラみたいなものだろ

「とりあえず探すかつ！」

何分歩いただろう？いいやもう何十分も歩いただろう全然それらしきヤツが出てこない
もう疲れた・・・

「あゝもうどこだよ疲れたし・・・ん？」

ふと目を落とすとそこには小さくて可愛いピンク色のリス？みたいなやつがいた

「おゝ可愛いなあなんて言うんだろうこれ？ほらおいで♪」

俺がリスみたいなヤツに近寄ると・・・

「ごわあ」

顔をリスみたいなやつに棍棒のような物で殴られた
これが結構痛い・・・

「コノヤロオ〜よくも・・・あ!!!!待ちやがれこのリスもどきっ
!」

俺がリスもどきを追いかけるのに夢中になっていると

ゴチン

何かにぶつかった

「何だよ今度は・・・」

見るとそこにはゴリラ?サル?どっちかわからないヤツがいた

「ん?こいつまさか森バルカンか?」

「ウホオ ダレダ?」

「うお〜!!!こいつ喋れんのか!!!?」

「ココ オレノ ナワバ」とりあえずやられとけっ!」ウホ!」

森バルカンを木刀で倒そうとすると

「お！なかなか素早い」

「ウホッ オレノハナシ キケ」

「知るかあ！」

ゴンッ

今度は俺の攻撃が当たったようだ。森バルカンは気絶してしまった。
というかザコですね

「あれ？こいつ額に傷がない！こいつは違ったのか」

ガサ ガサ

「ん？」

「「「「ウホォー」」」」

見渡すと俺の周りに10匹ぐらいの森バルカンがいた。中にはあの森バルカンのボスがいた
どうやらここはやつ等の縄張りだったようだ

「やっと面白くなってきたね」

「ウホ オマエ ナカマ ヤッタ オマエ タオス！」

「「「「ウホー！！」」」」

「こいやー！」

まず2体の森バルカンが俺に向かってきた

「フンッ」

木刀に光の魔法を宿して簡単に倒した

次には3匹襲ってきた

「ちよろい、ちよろい」

「またも簡単に倒してしまった」

「ウホッ オマエツヨイナ」

「いやお前たちが弱いだけだよ」

「ヤレ！」

「「「「ウホー!!!」」」」」

今度はボス以外の全員襲ってきた

木刀の切れ味を出し、光の魔法強くして全員斬った（これから木刀の切れ味を出すことを斬刀化と呼びます。さんとうか）

ズバ　ズバン　ズバンッ！

「ナニ！？ ヤラレタ！」

「残ってんのはお前だけだ！」

「ウホー！」

「あ！逃げやがったあいつ！」

その頃同じ東の森ではナツが何かをしていた・・・

ガンッ

「ぜってーグレイには負けねえ!!」

ナツは木を殴って特訓していたようだ・・・

「エルザにも負けねえ!!!!」

ドンッ ドンッ

「誰にも負けねえ!!!!」

ドンッ

コロッ

「いてっ！何だ？何か落ちてきたぞ？これはタマゴ？」

「ウホッ！」

「！！！！？」

「ソノタマゴ オレニ ヨコセ！」

「はぁ？俺が拾ったんだ！俺のモンだ」

「ヨコセ！」

「い・や・だ！」

「ナラ チカラズクデ・・・」

「俺とやろーってのかクソざる！」

「ウホオオオオ！！！」

「火竜の・・・??？」

「ウホ・・・」

ボタン

「たく！逃げやがって」

「あれ？ライトお前何してんだ？」

「お！ナツじゃねえか！俺は仕事してんだ。ま、今終わったけど。お前は何してんだ？」

「特訓だ！」

「で、何だそのでけえ卵？まさか食べるのか？俺にもくれよ♪」

「食わねえよ！このタマゴは・・・孵化させるっ！」

「ふーん ま、頑張りなっ！俺は仕事終わらせるから・・・」

「驚いていいとこだぞ・・・なあ俺もついていいいか？」

「うんいいぞ」

「よしっじゃあ早く行こうぜ」

「あ、待てってこいつ連れてかないといけないのに」

10分後

「早かったねえ」

「そうですか？」

「なあライト早くギルド戻ろうぜ！」

「待てって、その前に報酬を・・・」

「ほら早くもって行きな」

「いいな、5万J・・・」

「お前にはやらんぞ！」

「ほら！早く出てってくれ」

「いてっ！叩くなよ」

「ほらライトおいてっちゃうぞ！」

「もう待てって・・・」

「（あのライトって子、変な感じがした・・・気のせいかな・・・）」

しばらくして・・・

「タマゴだ〜！」

「何だナツうるせーぞ！」

ナツはあのでかいタマゴもってマスターとなんか喋ってる

「ハァー疲れた・・・マスター仕事終わり・・・何だよエルザとミラ」

「来るの遅いじゃないか！わ、私とミラのどちらとし、仕事にいくんだっ！」

「は？何言ってるの？俺はもう9時にはギルドに来ていたぞ。それにもう仕事なら行ったし・・・」

「・・・嘘を言うな！」

「本当だよちゃんと来たもん。あ、でもお前たちが何か喧嘩してたから声かけなかったけど・・・」

「……馬鹿!」

「へ?」

「声ぐらいかけろよ!」

「挨拶もしないとは礼儀になってないっ!」

ゴオオオオオ

「な、なに二人とも恐ろしい顔になっているんだい? ま、まてってちゃんと話し合って解決しような? 暴力はいけないよ?」

「「ライトオオオオオ! ! !」」

「うわああ! 誰か助けて〜」

その後俺は一日中エルザとミラに追い掛け回された

第7話 ライト初仕事！（後書き）

木刀の斬刀化のヤツは名前が気に入らないなら言ってください

やっぱり多分第10話で原作入ると思います

第8話 ナツのタマゴ（前書き）

なんとこの小説1万PV超えました！

何時の間につ！て、感じですね。

いやでも本当に見てくださってありがとうございます！

原作突入次回からかな？

第8話 ナツのタマゴ

俺がギルドに入ってから数日たった。あれからいろんな人と仕事に行った。このギルドにもかなり馴染んだ・・・気がする。ある日のギルドのこと・・・

「あゝあ暇だなあ」

「お前もこのギルドに馴染んできたな・・・」

「なに言ってるんだグレイ？お！カナなに読んでるんだ？」

「ん？このこと？これは週刊ソーサリーだよ。これ面白いんだよ」

「へ」

「あ！もう新しいの出たのかっ！カナ俺にも読ませてくれ」

「だめ！自分で買いな！」

「けちー」

「俺も買おうかなゝカナどこで売ってるそれ？」

「普通にそこら辺の本屋でも売ってるよ。あとギルドでも売ってるけど・・・ちょっと高いのよね」

「本屋に買いに行くの面倒だからギルドで買おう」

「え！本当に高いよ！普通1000Jぐらいで売ってるけど2000Jもするのよ？」

「ん？めんどいからいいよ」

マスターのところへ行って週刊ソーサリーを買った。カナの言った通り2000Jしたけどお金はいっぱいあるから気にしない

早速なかを見る

「ふむ、なかなか面白いなあ」

数十分後読み終わった

「ふー面白かった。ん？そうだグレイ！」

「ん？何だ？」

「これお前読みたいって言ってただろ。やるよこれ」

「マジかつ！サンキュー」

グレイに週刊ソーサリーをあげるとグレイはどこかへ行ってしまった

何分かカナと喋っていると

「キャー!!」

「ん? どうしたカナ?」

もう何か皆見てるぞ、何かいやな視線・・・

「ゴ、ゴキブリッ!!」

「何だゴキブリか・・・」

「やっつけてよ!」

「えゝなんで俺が」

カサカサカサ

「あ、ほらあっち行ったしもういいだろ？」

「だめっ！やっつけて」

「はあしょうがないなあ、ったく」

カサカサ カサカサカサ

「たっく逃げ足速いゴキブリだな」

カサカサ

「あミラ、ゴキブリいるから気を付けて」

「な、ご、ゴキ……」「どうしたミラ？」ゴキブリい
やーーーーー！！！」

「ど、どうしたミラ落ち着けて！？何でサタンソウルウウウ！
！？」

「いやーーーーー！！」

ドゴーン

「おいっミラやめろギルドが壊れる！」

「あ、エルザか、ミラを止めてくれよ」

「・・・無理だ」

「はぁ？何で」

「ミラはゴキブリが苦手だなゴキブリを見るとああなるんだ。こうなればゴキブリを倒すしかない！」

ドン ドゴーン

「何でこうなるんだ」

「早くゴキブリを倒すぞ！」

「はいはいわかりましたよ・・・」

「はあああっ！」

「何で剣でゴキブリ倒すんだ！余計ギルドが壊れるじゃないか」

ドゴーン ズバンッ

「おいっ！二人ともやめろ！なんかいろいろ壊れてるし！」

「あっち行ったぞっ追えー！ー！」

「うわぁどうすりゃいいんだ！！」

すると扉からナツとりサーナが入ってきた・・・ナツは口から火を吹きながら

「俺のタマゴどこ行ったー！！！」

ポーッ

すると見事にナツの口から出した炎がゴキブリに命中しゴキブリは真っ黒に焦げた

「お！ナツ、ナイス！！これでもう大丈夫だな」

「ん？何してんだ皆？いや今はそれどころじゃないっ！」

「どうしたんだナツ？」

「さっきも言ったけど俺の卵が消えたんだ！！誰だよ食ったのっ！」

「どうしたナツうるさいぞ！」

「エルザお前食っただろー！！吐き出せよ！」

「私は食べてなどいない！」

「じゃあミラだろ！」

「はあ？てめえなに人の事疑ってんだ！そう言うナツが食べたんじゃないか？」

「食ってねえー！！！！じゃあグレイだろっ！」

グレイは週刊ソーサリーに夢中のようだ・・・

「なに本なんか読んでんだグレイイイイ！！！」

「あ！てめえ俺の週刊ソーサリーをよくも燃やしてくれたな！……！」

「やんのかグレイ」

「上等だ！！」

「ってかグレイ服……」

「おおお！」

「まさか、ライトお前が食ったのか？俺がタマゴ拾ったとき、食いてえとか言ってたし」

何だよ皆、変な目でこっちを見るな！

「お、俺は食ってないぞ」

「じゃあ誰だよ！！？やっぱミラだろっ」

「何回も人の事疑うんじゃねえぞナツ！」

「いたっ！叩くんじゃねえよ！」

「何だナツ私とやろーってのか？」

「よさないか！ミラ」

「このやろう!!!」

ナツが近くにあったコップを投げた

「当たるか、そんなモン！」

ミラが余裕でかわすと後ろにいたエルザに当たった

「大丈夫かエルザ？」

「う、痛い・・・ナツ許さんぞっ！」

「やべっ当たっちゃまった！ミラ避けんじゃねえよ！」

「何だとゴラ！ぶっ飛ばしてやるっ！」

その後、子供たちの大喧嘩が始まり大体の子供たちは喧嘩に混ざってしまった

もちろん俺は止めに入らなかった。なぜなら面倒だからだ！

するとエルフマンがやってきて

「ナツ、リサーナごめん！」

「「「「「ん？」「」「」「」

子供たちはようやく喧嘩をやめ、全員でエルフマンを見る

「ま、まさかエルフマンが食べちゃったのか・・・？」

「いやそうじゃなくて、ほら、いつもナツ夜になるとタマゴほったからしにしちゃうだろ。だから俺がこっそり一人で温めてたんだ」

「よかったー」

「ありがとうエルフ兄ちゃん！」

「あれ？なんかタマゴ浮いてるぞ！」

「おお！とうとう・・・」

ピカー

タマゴが光だした。すると周りの大人たちも集まってきた
だんだん光が強くなってきた

ピカーー

するとタマゴが割れて中から青毛の猫？が出てきた！

『猫!?!』

あれ? ちょっと待てよ? 猫ってタマゴから産まれるか?

しばらく浮いたあと猫? はナツの頭の上に乗った

「あい!」

『可愛いー!』

皆、猫の周りに集まり騒いでいる

「見てよナツ、さっきまで皆カリカリしてたのに、あんなに喜んでる・・・あの青色の猫ちゃん。幸せを呼ぶ青い鳥みたい!」

「幸せか・・・じゃあこいつの名前はハッピーだ!!!」

「あいっ!」

その後も、しばらくギルドはドンちゃん騒ぎしていた・・・

第8話 ナツのタマゴ（後書き）

このハッピー誕生の話は記憶があいまいです。まあでも大丈夫かな？

次回はとうとう原作突入！！・・・の前に一度、主人公紹介しますゴチャゴチャしているんで。

でも短いかも？

主人公設定（原作突入後）（前書き）

主人公の設定がごちゃごちゃしていたので原作入る前に一度紹介したほうがいいかな〜と思ったので書きました。

とても短いです、はい

ま、読まなくても大丈夫ですね

主人公設定（原作突入後）

名前 ライト・ガレノフ

18歳

好きなものはギルドと仲間と甘い物

嫌いなものは面倒なこと

ライトには二つの異名があり、一般人や評議員には^{シャイニング・フェアリー}光の妖精などと呼ばれていて、闇ギルドの者や評議員がふざけて^{ダークネス・フェアリー}闇の妖精などと呼んでいる。

魔法 光と闇の魔法・・・光の魔法はスピードをあげる魔法。闇の魔法はパワーをあげる魔法。

光の魔法、闇の魔法どちらも形を持つことも出来るし、体に宿す

ことも出来る便利な魔法である。

外見はジェラルルの赤い紋章をとった姿にとても似ているが神の力によりFAIRY TAILの世界の者は誰もジェラルルに似ていることがわからない。実力はギルドの中ではギルダーツとマカロフを除けば最強かもしれない。ラクサスやミストガンなどの最強候補はギルドに居ることが少ないがライトは、大体ギルドに居る事が多い。エルザに初めて会う以前の記憶がない。ギルドに入りたての頃はどんな事でも、ある程度修業すればすぐ強くなるようになっていたが歳をとるにつれて、だんだん効果が薄れていているらしい。常に左の腰に愛用の木刀をさしている。ライトの二つの異名の光の妖精と闇の妖精のうち、よく知られているほうは闇の妖精である。

フリーダークネス・フェアリー
シャイニング・フェアリー
フリーダークネス・フェアリー

主人公設定（原作突入後）（後書き）

今後、この主人公の設定は改訂するかもしれませんがご注意ください・・・

次回こそは、原作突入です！！！！お楽しみに

第9話 火竜（サラマンダー）（前書き）

漫画のやつほとんどパクリました

でもちゃんと書きましたよ

どうぞ

第9話 火竜（サラマンダー）

フィオーレ王国、人口1700万の永世中立国、そこは魔法の世界。魔法は普通に売り買いされ、

人々の生活にねずいていた。そして、その魔法を駆使して生業とする者どもがいる。人々は彼等を

魔導士と呼んだ。魔導士たちはさまざまなギルドに属し依頼にに応じて仕事をする。そのギルド、

国内に多数。そして、とある街に、とある魔導士ギルドがある。かつて、いや、のちのちに至るまで数々の伝説を生み出したギルドそ

の名は・・・フェアリーテイル妖精の尻尾

俺はライト、このギルドフェアリーテイル妖精の尻尾に入ってから5年たった。

この5年でいろいろな事があったな〜まあほとんど覚えてないけど

(笑)

現在、俺はS級魔導士だ。えーっと今は仕事でハルジオンの街に来ている。

ナツもハルジオンに用があるらしくて俺とナツ・・・あとハッピーも一緒にハルジオンに来ている

「あ、あの・・・お客様大丈夫ですか？」

「あい！いつもの事なので」

「おいナツ！早く行こうぜ」

「無理・・・もう二度と列車には乗らん・・・うぷっ」

「情報が確かならここに火竜サラマンダーがいるはずだよ。いこっ！」

「ちょっと休ませて・・・」

「ほら早くしないと列車が発車しちゃうぞ。よいしょっと」

「う・・・わりい　うぷっ」

「ん？何か動いているような・・・？」

ガタン ゴトン ガタン ゴトン

「あ！発車しちゃった」

「た〜す〜け〜て〜」

今回ナツと一緒にハルジオンに来ているがお互いの目的が違うのだ。
(もちろんハッピーもいるよ)

俺は仕事でハルジオンに来ている。内容は・・・巨人タイタンノーズの鼻から追放された紅天プロミネンスのボラとか呼ばれてる悪行ばかりしているクソな魔導士を捕まえるという仕事だ。

まあ異名で呼ばれているぐらいだからきつと強いんだろうなあと期待してこの仕事にした。最近仕事が早く終わってしまっつまらないのだ。

ナツは何か父ちゃん探しに来たらしい・・・父ちゃんといってもナツはドラゴンに育てられていたらしい。なんでもイグニールとかいうドラゴンなんだって。まあ・・・街中にドラゴンいたらおかしいけど

一方その頃同じ街のある魔法店では・・・

「えゝこの街、魔法屋一軒しかないの？」

「ええ、元から魔法より漁業が盛んな街ですからねゝ」

「街の者も魔法を使えるのはかなり少ないもんで・・・この店もほぼ旅の魔導士専門店ですわ」

「無駄足だったかしらねえ？」

「まあそういわずに見ていってくださいな新商品だってちゃんとそろってますよ」

「女の子に人気なのは色替カラーズかな？その日の気分に変えて服の色をチェンジってね」

「持ってるし」

「あたしは門ゲートの鍵かぎの強力なやつ探しているの」

「珍しいねゝ」

「ん？これは・・・白い子犬ホワイトドギーじゃない!!」

「こんなの全然強力じゃないよ？」

「いいのゝ探してたんだ♪いくら？」

「2万Jだよ」

「お・い・く・ら・か・し・ら？」

「だから2万J」

「本当はおいくらかしら？すてきなおじ様♪」

「ちえっ10000Jしかまけてくれなかった・・・あたしの色気は
たったの10000Jかつ！」

キャー キャー

「何かしら？」

「この街に有名な魔導士が来ているんですってー」

「サラマンドー火竜様よー」

「あ．．．まさかあの店じゃ買えないっていう火の魔法を操るっていう．．．」

「まさかこの街に来てるの!？」

サラマンドー
火竜．．．カッコいいのかしら？

「ちょっと行ってみよう♪」

その頃．．．

「はあ列車には二回も乗っちゃまし．．．」

「てか、何でナツ乗り物に弱いんだ？」

「知るか．．．俺が知りてえぐらいだよ。つか腹減った．．．」

「おいらたちお金ないもんね」

「お前らどこで金使ってた？結構稼ぎいいはずだろ？」

「俺とハッピーの飯代でなくなってたよ

っ！かーライトお前金いっぱい持っているんだからおごってくれよ」

「そういうと思って・・・」

「「おお！！！」」

「お金は置いてきました〜はい残念♪」

「ふざけんなく！！こっちはスッゲ腹減ってたぞ！」

「とにかくお前ら誰だったか探してるんだろ？」

「あ！おいら魚置いてきちゃった〜」

ハッピーもうその話はいいだろうよ・・・

「俺たちが探してんのはイグニールだよ。なあハッピーサラマンダー火竜ついてイグニールのことだよな？」

どうしよう何時言おう・・・今更こんな街中にドラゴンいないなんて言えねえ〜ナツきずいてくれよ〜

「あい！火の竜なんてイグニールしか思い当たらないよね」

「だよな」

「やっと見つけた！」

「ちょっと元気になってきたぞ」

「あい！」

キヤー火竜様サラマンダー

「「「！！！」」」」

「ホラッ！噂をすればなんとやらって！！」

「あい！！！」

えーーーーー！！マジかよ！やべえ街にドラゴンいたのか！！？
いや絶対、街にドラゴンがいる訳ない・・・じゃ何なんだ？

キヤー キヤー キヤー 火竜様サラマンダーーこっち向いて〜♪

「(な、なに？ なんなのこのドキドキは？)」

ドキ ドキ

「(ちよ、ちよつとあたしってはどうしちゃったの〜？)」

「はは、参ったなこれじゃ歩けないよ〜」

チラリ

「(はううう！！)」

「(有名な魔導士だから？ だからこんなにドキドキするの？)」

ドキ ドキ ドキ

「イグニール！」

「おい！ ナツ待て！ そいつは・・・」

「(これってもしかしてあたし・・・)」

「イグニール!!!」

『!?!!』 「はっ!」

「・・・」

「・・・」
ナツと火竜といわれる男がにらみ合っている

あゝあやっぱり違ったか・・・街にドラゴンいるわけないよなゝ

「誰だお前・・・?」

サラマンダー
「火竜といえ、分かってもらえるかな?」

「はあ・・・」

「人違いだったね」

「誰だよあれ・・・」

「はやっ！」

「ちよつとーあんた等失礼じゃない!？」

「サラマンダー火竜様は、スッゴイ魔導士なのよー」

「謝りなさいよ!!!!」

「な、なんだ？」

「面どくせーやつ等だな」

「まあまあよしたまえ。彼等だって悪気があった訳じゃないんだから」

「あゝん」「やさし」

キュッ キュッ キュッ

「僕のサインだ友達に自慢するといい」

「いらん」

「つか誰だっけコイツ？」

「なんなのよこいつ等！」

「ちよう失礼じゃない！」

「どっか行きなさっ！」

「いてっ！」

「うお！」

「君たちの熱い歓迎には感謝するけど・・・僕はこの先に用があるんでね」

「失礼するよーあ、夜は船上でパーティーをするよー皆参加してくれるよねー」

「もちろんですー」

サラマンダー
すると火竜と呼ばれている男は火の魔法を使い何処かへ消えてしま
った・・・

「何だあいつ？」

「あいつ、何かどこかで見たことあるような・・・？」

「ほんとついけ好かないやつよねー」

「「「??:?」」」

後ろを向くとそこには俺と同年ぐらいの女の子がいた

「さっきはありがとね」

「？」

「だ、誰？」

ブロンドヘア
俺たちは金髪の女の子に近くのレストランに連れてってくれた
マジありがたいですっ！

「あんふぁいいひほはが」

「あい！」

「うめえー甘いもんは、やっぱうめえー！」

「ナツにハッピーにライトだっけー？もつとゆっくり食べれば・・・？
なんかとんできてるし・・・」

ルーシイとかいう女は長ったらしい話をはじめた・・・さっきの
火竜サラマンダーって男は魅了チャームっていう魔法を使っていたらしい。魅了チャームは人々の
心を術者に引き付ける魔法らしい。確かこの魔法は数年前に発売禁
止になっていた気がする。ルーシイは俺達が飛び込んできたから魅
了ムが解けたんだって。なんかルーシイは魔導士らしくギルドには
まだ入ってないんだとさ。

「そういえば、あんた達、誰か探してたみたいだったけど・・・？」

「イグニールってヤツだ」

「火竜サラマンダーがこの街に来るからって聞いたから来てみたはいいけど別人
だったな」

「火竜サラマンダーって見た目じゃなかったんだね」

「てっきりイグニールかと思ったのにな」

「見た目が火竜サラマンダーって・・・どうなのよ人間として・・・」

「ん？人間じゃねえよイグニールは本物のドラゴンだ」

ガタン「・・・・・・・・！！！」

「そんなの街中にいる訳ないでしょ！！」

「「！！！」」

「オiiii今きずいたって顔すんな！」

「ハア・・・やっときずいたかお前等・・・」

「あ！ライトお前きずいてやがったのかっ！何で言わねえんだ！」

「えーだって何か可哀想なんだもん・・・」

「てんめえーコノヤロオオオ！！」

「まあまあ落ち着けて・・・ほら今度飯おごってやるから・・・」

「そ、それ本当か？」

「ああ本当だ。近いうちにおごってやる」

「ヨッシャー！ー！！」

「はは、私はそろそろ行くけどゆっくり食べなよ」

「お！ありがとなっ！」

「ご馳走様でしたっ！」 「でしたっ！」

おいおい、ナツとハッピーが急に土下座をしたから周りの人たちが騒いでるじゃねえか・・・

「キヤー！やめて恥ずかしいから」

「い、いいのよあたしも助けてもらったし・・・」

「あんまり助けたつもりがないところが・・・」

「あい、はがゆいです・・・」

「あ！そうだコレやるよ！」

「いらんわっ!!」

「ナツそんなじゃ駄目だろ……」

「そ、そうなのか？」

「（意外とライトってちゃんとしてるのね……ナツよりは）」

「ここに『ルーシィへ』って書かないと」

「そうかつ！」

「そうじゃないでしょ!!!!」

わたしは今ナツ達と別れて近くの公園のベンチで週刊ソーサリーを

読んでます。周りに誰もいなさそうだしちよつとくつろいじゃおっかな？

「まーた妖精の尻尾が問題起こしたの？今度は何？・・・デボン盗賊一家壊滅するも民家7軒も壊滅・・・あははははっやりすぎ！！あ、グラビアミラジェーンなんだ。妖精の尻尾の看板娘ミラジェーンこの人でも無茶苦茶やったりするのかしら？つぶ あ！やっぱり妖精の尻尾って言ったらこの人よね」

このあたりで知らない人はいないんじゃないかと思われるくらいの人気の光の妖精！

「なにになに？光の妖精10代の若さでとうとう聖十大魔道に！じつは、評議員から、かなり前から聖十大魔道にならないかと誘いを受けていたが、本人はずっと断り続けていたらしい。聖十大魔道になっても評議員の頼みは、ほとんど断っている・・・か」

「光の妖精はかなり前から聖十大魔道になるのは確実といわれていたのよね。なんですぐに聖十大魔道にならなかったのかしら？とにかく・・・」

「魔導士ギルド妖精の尻尾最高にカッコイイなあ！！！」

すると後ろから急に誰かが出てきた！

「へく君妖精の尻尾に入りたいんだく」
フェアリーテイル

「サ、火竜！？」
サラマンダー

「いやあ探したよ・・・君のような美しい女性をぜひ僕の船上パーティーに招待したくてね」

「はあ！？」

「言っておくけどあたしには魅了チャームは効かないわよ！魅了チャームの弱点は『理解』を知っている人にはその魔法は効かない」

「やっぱりね目が合ったときに魔導士だと思ったよ。いいんだ僕のパーティーにさえ来てくれれば」

「誰があんたみたいなの、えげつない男のパーティーになんて行くもんですか」

「えげつない？僕が？」

「魅了チャームよ、そこまでして騒がれたい訳？」

「あんなのただのセレモニーじゃないか。僕はパーティーの前はセレブな気分でいたいだけさ」

「あんた有名な魔導士とは思えないほど馬鹿ね」

あたしは呆れて火竜サラマンダーから離れようとする

「つちよ、待ってよ」

「君・・・妖精フェアリーテイルの尻尾に入りたいんだろ？」

ピタッ

「妖精フェアリーテイルの尻尾サラマンダーの火竜サラマンダーって聞いたことないかい？」

「ある!!!」

「あんた妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士だったの!？」

「そうだよ。なんだったらマスターに話通してあげててもいいよ」

「素敵なパーティーになりそうねえ♪」

「き、君わかりやすい性格してるね・・・」

「ほ、本当にあたし妖精フェアリーテイルの尻尾に入れるの？」

「もちろん魅了チャームの事は黙っておいてね？」

「はい、はい♪」

「それじゃあ今夜のパーティーで会おう」

「了解でありますっ!」

「は!!! 疑似魅了^{チャーム}してたわ!! でも・・・」

「妖精^{フェアリーテイル}の尻尾に入れるんだ!! やったー!!」

「入るまではあの男に愛想よくしておかないとね」

ナツ達と飯食ってる間にいつの間にか夜になっていた・・・今思うとかなり食ったんだなと思う。まあほとんどはナツが食べたんだけどね。

「はぁ〜食った食った!」

「あい」

「そういえば俺、仕事すんの忘れてたっ!!」

「もういいだろそんなこと、たらふく食えたんだし」

「よくないし……」

「そーいやあの船火竜サラマンダーが船上パーティーやるってやつかな？」

「うぷっ気持ちワリイ……」

「すげえな……想像しただけで酔えるのか……」

「見てみてー！あの船よー！火竜サラマンダー様の船ー！あーん私もパーティー行きたかったなあ」

「火竜？
サラマンダー」

「知らないの？今この街に来ているっていう有名な魔導士なのよ」

「なんでもあの有名な妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士なんだって」

「「！！！」」

「あいつ……！！！」

「……」

「妖精フェアリーテイルの尻尾……」

ザザアアア　　ザザアアア

ガヤガヤ　　ワイワイ

「ルーシイか・・・いい名前だね」

「どうもお」

「まずはワインで乾杯といこう」

「他の女の子ほっといていいの？」

「いいのいいの今は君と飲みたい気分なんだよねえ」

サラマNDER
火竜が指を鳴らすとワインの中身が空中に浮いた

「口をあけてごらんゆっくりと葡萄酒の宝石が入っていくよ」

「(うざーっ!)」

「(でもここはガマンガマン・・・)」

「!?!」

「・・・これはどういうつもりかしら？」

「睡眠薬よね」

「ほっほーよくわかったね」

「勘違いしないでよね。あたしは妖精の尻尾には入りたいけどあんなの女になる気はないの」

「しょうがない子だなあ素直に眠ってくればイタイ目みずにすんだのに」

「え?ど、どういう?」

すると後ろから数人の男達が入ってきた

「な、何なのコレ？」

「そうこそ我が奴隷船へボスコに着くまではおとなしくしてもらおうよ」

「ちょ、ボスコって妖精の尻尾は!!?」
フェアリーテイル

「言ったら？ 奴隷船って初めから商品にするつもりで君を連れ込んだ。あきらめな」

「そ、そんなあ……」

「火竜サラマンダーさんも考えたな魅了チャームにかかっている女どもは自らけつふって商品になる」

「この姉ちゃんチャームは魅了が効かねえみたいだし少し調教が必要だな」

「（や、やだ嘘でしょう）」

「（何なのよこいつ等……!! こんなことするヤツが……）」

「ふーん星霊魔導士か……」

「この魔法は契約者以外使えない。つまり僕には必要ないってこと

だ」

ポイツ

「（これが妖精の尻尾の魔導士か……！）」
フェアリーテイル

「まずは奴隷の烙印を押させてもらうよ。ちょっと熱いけどガマンしてね」

「（魔法を悪用して、人を騙して、奴隷商ですって……！）」

「最低の魔導士じゃない」

バキィ

「……！！」

ドシン

「ひ、昼間のガキ？」

「ナツ……！！？」

ザザアア

「おぷっやっぱ駄目だ無理・・・」

「えーーーーー！！かっこわるーーーー！！」

「な、なんだこりゃ？なんで空からガキがふってくるんだ？」

「しかも酔ってやがるし・・・」

「ルーシィ何してるの？」

「ハッピー！？騙されたのよ妖精の尻尾フェアリーテイルに入れるてくれるってそれであたし・・・」

「てかハッピーあんた羽なんてはえてたっけ？」

「細かい話は後回しっばいね」

「逃げよっ！」「わっ」

「ちょ・・・ナツはどうするの！？」

「二人は無理です」

「あらま・・・・・・・・」

「逃がすかあああ!!」

「おっと」「キャー!!」

ボオオオオオ

「っちあの女を逃がすな! 評議員に通報されたら厄介だあ? ? ?」

ドオオオオオン

ちよつとその前のこと・・・・・・・・

俺達は火竜サラマンダーの船に向かっていた。ナツはハッピーで飛んで。俺は光の魔法でハッピーの魔法の翼エーラを真似して飛んでいた。

「ナツ！お前は船に乗り込め！」

「えーーーーー！酔いたくねえ！」

「大丈夫俺が何とかするから」

「・・・わかったよ・・・」

「ナツじゃあ先にいけ」

「わかってるよっ！！」「あいさー！」

ナツ達が先に乗り込んだ？ので俺はどうするか考えていたら

「ん？これは鍵？あ、これは星霊魔導士の鍵だ！とりあえず預かっておこう」

あれこれ考えたけどやっぱりこれしかないと思った
闇の魔法で、大きな手を作った。これで岸まで押すということだ

バキイ

「うん、ナツもやっ
と乗り込んだし俺もやるか！」

「うおおおおお！」

ド
オ
オ
オ
オ
ン

「なんだ！？何か大きな物がぶつかったような音が……」

「いけええええ！」

ド
ド
ド
ド
ド
ド

ド
オ
オ
オ
オ
オ

「うわああああ！」

ドーーーーーン

「ふーこれでよしっ」と

「えーーーーー!! ライト何やってんの!!?」

「お! ルーシィなにやってんだ? あ! そういえばもしかしたらこれルーシィの?」

「あ!! そうそうそれあたしの鍵! ありがとう。ところで船がなくなってるけど・・・」

「なくなったんじゃないかって岸に俺が戻したんだよ」

「え!! じゃあライトって魔導士なの!?」

「あれ? 言ってなかったっけ? それよりナツだ!」

「い……一体何事だ!？」

「止まった……」

「!!!!」

「揺れが止まった……」

「ナツ……!! だいじょう……!!」
オオオオオオオ

「俺も参戦するぞ」

「おい! 小僧達、人の船に勝手に乗ってきちゃアカンだろ。あ!？」

「オイ! さっさとつまみ出せっ!」

「ハ、ハイ」

「いけないここはあた「大丈夫! ナツも魔導士だから」えーーーー
!!!!」

「お前が妖精の尻尾の魔導士か」
フェアリーテイル

「それがどうした?」

「よおおくツラ見せろ」

「俺は妖精の尻尾のナツだ! おめえなんかみたことねえ!!」
フェアリーテイル

「なにっ！！！！」

「妖精の尻尾！！！！フェアリーテイル ナツが妖精の尻尾の魔導士！！？」

「あ！いっておくれど俺も妖精の尻尾の魔導士だから！！」フェアリーテイル

「こっちのガキもか！！」

「あの紋章は・・・間違いねえボラさん！！」

「ば、馬鹿その名で呼ぶな！！」

「ボラ・・・あー！！！！お前探したんだぞっ！」

「オメエが悪党だろうが善人だろうが知った事じゃねえが妖精の尻尾を語ることだけはゆるさねえ！！」フェアリーテイル

「ええええい！！ごちゃごちゃとうるさいガキどもめ！！」

するとボラは火の魔法で俺達を突き飛ばしやがった

ボオオオオオオ

「ナツ！！ライト！！」

「フン！」

「まずい」

「何だコレ？お前ほんとに火の魔導士か？こんなまずい火初めてくったぞ」

「・・・・・・・・！！！」 「はぁ！！！！？」

「ふーご馳走様でした」

「な、な、なんだこいつは！！！」

「火、火を食っただと！」

「ナツには火は効かねえぞ・・・・・・・・まあ今のは俺にも効かなかったけどな・・・」

「・・・・・・・・こ、こいつ等バケモンか・・・・・・・・！！！」

「食ったら力が湧いてきた・・・・・・・・いづくぞおおお！！！」

するとナツはブレスの構えをとる

「こいつまさか・・・ボラさんおらあこいつ見たことあるぞ！！！」

「はぁ！！！！？」

「桜髪に鱗みてえなマフラー間違いねえこいつが本物の・・・」

ドゴオオオオオオオ

サラマンダー
「火竜………」

「よく覚えておけよコレが妖精の尻尾の……魔導士だっ!!」
フェアリーテイル

「火を食べたり、火で殴ったり……これ本当に魔法なの!？」

「竜の肺は焰を吹き、竜の鱗は焰を溶かし、竜の爪は焰を纏う……
これは自らの体を竜の体質へと変換させる太古の魔法」
エンシェントスベル

「な、なにそれ？」

「元々は竜迎撃用の魔法だからね」

「あ、あらま………」

ドラゴンスレイヤー
「滅竜魔法!!! イグニールがナツに教えたんだ」

「く、くそ、あっちのガキなら何とかかなりそうだしえええええ!!」

『おおお!!』

「ハア? あんた等なめてんの?」

俺は木刀を出した

「はっはっは、てめえこそなめてんじゃねえか、そんなもの折ってやる！」

「折れるもんなら折ってみやがれ！」

「ライト！避けないと危ないっ！」

ザンッ

『ぐわぁ・・・！』

ドサッ

「て、てめえ何もんだ！？」

「んゝゝゝそうだねえこれでわかるかな？」

俺は右手に闇の魔法、左手に光の魔法を宿した

「ま、まさか……お前は……闇の妖精……!!」
ダークネス・フェアリー

「え!!!ま、まさかライトがあのだ聖十大魔道の……」

「ほら、ボラさんよくさっさと捕まってくれないかな?じゃないと俺帰れないんだ?」

「ひ、ひ……化け物……!!」

「あ、逃げやがった!ナツ!」 「言われなくても!」

「く、くそ!!」

「おっとそんなもんあたんねえよ」

ボラは火の魔法を出したがナツに余裕でかわされてしまう……するとルーシィのほうへ向かっていく

「ルーシィ!危ないっ!」 「キヤー!!」

さかさず俺が木刀に闇の魔法を宿してなぎ払った

「大丈夫かルーシィ？」

「あ、え、うん、ありがとう・・・（近くで見るとカッコイイかも／＼／＼／）」

ドーーーーン

「ん？ナツか？」「いや今のはおれじゃねえぞ？」「じゃなんだ？」

「お、おいあれ見ろ山が消し飛んでるぞ！！」

見ると山の上部分が消し飛んでいた・・・

「あ！やべえまたやっちゃった・・・」

「えーーーーー！！普通アレだけで山消し飛ばないわよ！」

「え！そうか？いやーでもよくあるじゃんいつの間にか山が消し飛ぶって」

「いやいやいや普通ないからっ！」

「あ！ってかオイ、ナツこれやりすぎじゃね？」

こっちは港が滅茶苦茶になっていた。家とか、もうほとんど形がない……

「そうか？ いやでもきつとこれ最初からこうなってたよ」

「ん、言われてみれば……」

「そんなことあるかつ！！！」

「さてと、じゃ俺はボラを持ち帰らないとな……」

ガッシャ ガッシャ ガッシャ

「こ、この騒ぎは何事かね！！？」

「軍隊！」

「！！！！」

「やべえ！逃げんぞ！」

「何であたしまでーーーー！？」

「あ！おいてくんじゃねえ！」

「だって妖精の尻尾フェアリーテイルに入りたいんだろ？」

「来いよ!!」

「うん!!!!!!」 「俺をおいていくなああああ!!!!!!」

「評議員」

「まゝた妖精の尻尾フェアリーテイルのバカどもがやらかしおった!!」

バンッ

「今度はハルジオンの港半壊、ハルジオンの山消滅ですぞ!信じられますかっ!」

「いつか街ひとつ消えてもおかしくないぞっ!」

「縁起でもないこといわんでくれ・・・本当にやりそうじゃ・・・」

「罪人ボラ検挙の為と政府には報告しておきましたがね」

「いやはや・・・」

「俺はああいうバカども結構好きだけどな」

「貴様は黙つとれ!!」

「確かにバカどもじゃが有能な人材が多いのもまた事実・・・」

「だからこそ思案に余る」

「痛し痒しとはこの事ですな」

「放っておきやいーんですよ」

「何だと貴様!!!!」

「あんなバカたちがいないと……この世界は面白くない……」

第9話 火竜（サラマンダー）（後書き）

疲れましたね・・・今までで一番長かったです

次の更新何時になるかわかりません

でも出来れば8月までには更新したいです。

第10話 ギルドマスター（前書き）

すいませんっ！

本当はもっと早く更新するつもりだったんですけど夏休みの宿題をいろいろやってまして・・・次はなるべく早く更新するつもりです！

第10話 ギルドマスター

あれから何とか俺は軍隊に捕まらずにすんだが、かなり危なかった・
・・仕事済ませた後ナツ達を追いかけてナツに飛び蹴り食らわし
といた。それでも気がすまないから飯おごるのもしにしてやった。
ナツが泣いて謝ってきたけど（あとハッピーも）このような事が以
前にも何回もあったので、今回は飯おごるのなしにした。そのあと
『飯がゝ飯がゝ』とか何回も泣きながら言ってた（笑）今はギルド
前です。

「わぁおっきいね！」

「ようこそ妖精の尻尾へ！！！」
フェアリーテイル

ガヤガヤ

ガヤガヤ

「ただいまー！！！！」

「ただー」

「ふぁゝあ、ただいま」

「ナツ、ハッピーおかえり」

あれ？俺さりげミラに無視された？俺そんなに影薄いのかな・・・

「派手にやらかしたなあハルジオンの港の件新聞に乗って・・・」

「てめえ^{サラマンドー}火竜の情報ウソじゃねえかー！ー！！」

「あらあらナツが帰ってくると早速お店がこわれそうね」

「もう壊れてるよー！ー！」

いつもの乱闘が始まったか。こいつら何回暴れば気が済むんだ。ほんと・・・

「誰かナツとめろー！」

バキッ

ドカ

「ナツ・・・てめえ」「ぎゃふっ！」

「すごい・・・」

ドガ ゴス ドゴ ドカ

バキッ

「あたし・・・本当に妖精の尻尾来たんだ・・・」
フェアリーテイル

「ほらルーシイそこでボーっとしてると巻き込まれるよ」

俺はルーシイの手を掴んだ。ん？べ、別に変な意味はないんだからねっ！

「あ・・・え・・・うん♪」

ん？何でルーシィの機嫌がいいんだろう？まあいいやとりあえずミラのところへ行こうかな？

「あ！おかえりライト何時帰ってきてたの？」

「・・・俺さつきナツが帰って来たときに隣に居ただけど・・・」

「えっウソ！ご、ごめん・・・。ところでライト・・・」
「その子だあれ？」

ゴオオオオオオオ

ん？何かミラから殺気が・・・する？

「こ、この子は仕事先で知り合ってたね。フェ、フェアリーテイルに入りたいたって」

「あ、そう・・・」

ホッ

良かった！ミラの殺気っぽいのも消えた

「ほ、本物のミラジェーンだ♪それより、あれ止めなくていいんですか？」

「いつもの事だから、放っておけばいいのよ」

「あらら・・・」

「ちょっと俺マスター呼んでくる・・・」

「うん分かったわ」

「さて・・・あなた名前は？」

「ルーシイです！よろしく願いしますっ！」

「まさかとは思うけど・・・あなたライトのこと・・・・・・・・・・」

「え！ミラジェーンさんですか！？」

「ミラでいいわよ（ライバル増えたわね・・・・・・・・）」

ピューン
ガン
ガラス瓶がミラに向かって飛んで行って・・・

「キャー！ミラさん大丈夫ですか！」

「・・・・・・・・」パタッ

ドカーン

「おふっ」

「きゃーっ！！」

「へっへーん」

「あーうるさい落ち着いて酒も呑めないじゃない」

「あんた等いい加減に・・・」

「しなさいよ・・・」カナが・・・

「あつたまきた！！！」グレイが・・・

「ぬおおおっ！！」エルフマンが・・・

「困った奴等だ・・・」ロキが・・・

「かかってこいやー！！」ナツが・・・

皆それぞれ魔法を使い始めようとしていた・・・

「魔法！？」

「これはちょっとまずいわね・・・」

「そこまでじゃ・・・・・・・・・・やめんかバカタレ!!」

「でかーーーーっ!!!!」

ピタ ピタ

ピタ ピタ

しーーーーーん

「あらマスター・・・」

「マスター!!?」

「あ、俺もいるぞちゃんと」

「ふんぬうううう」

マスター・・・ルーシイがとんでもなくビビッてんぞ・・・

プンプンプンプン

するとマスターはいつもの小さな体に戻った

「ええーっ!!」

「よろしくネ」

「とうっ!」

ゴチーン

マスターはジャンプして2階の手すりの上に乗ろうとしたが・・・

手すりに頭を打った。アレは痛いだろうな

「まゝたやってくれたのう貴様等・・・見よ評議会から送られてきたこの文書の量・・・をまずはグレイ」

「あ？」

「密輸組織を検挙したまではいいが、その後街を素っ裸でふらつき、あげくの果てに干してある下着を盗んで逃走」

「いや・・・だって裸じゃまずいだろ」

「グレイの脱ぎ癖まだ治ってないのかよ」

「ライト、お前は糖から離れろ、糖から・・・いつも甘いもん食べすぎなんだよ」

「漢は甘い物なんて食べないっ！！それが漢だ！！！」

何言ってるのか分かんねえよエルフマンよ・・・

「エルフマン！貴様は要人護衛の任務中に要人に暴行」

「だ、だって『男は学歴よ』なんてなんて言うからつい・・・」

「お前は男に反応しすぎなんだよ」

「男じゃなくて・・漢だっ!!!!」

「カナ・アルベローナ経費を偽って某酒場で呑むこと大樽15個しかも請求先が評議会」

「バレてたか・・・・」

「いつも思うけどさ、どんだけ胃袋でかいんだよ」

「酒は別腹さ!」ゴク　ゴク

「ロキ・・評議員レイジ老師の孫娘に手を出す。某タレント事務所からも損害賠償の請求がきておる」

「・・・・」

「はっはっは!さすがロキだね」

「それ褒めてくれてるのかな?」

「ナツ．．．．デボン盗賊一家壊滅するも民家7軒も壊滅。チユーリイ村の歴史ある時計台倒壊。フリージア教会全焼。ルピナス城一部損壊。ナズナ溪谷観測所崩壊により機能停止。ハルジオン港半壊。」

ナツ．．．やりすぎじゃねえか？絶対ナツのせいで妖精の尻尾フェアリーテイルの評判悪くなってるよな

「そして．．．ライト！！「あれ！俺も？」お前は山を消しすぎじや！もう何回地図を書き変えていると思っている！もう少し落ち着いて仕事をしてくれっ！」

あれ？俺そんなに山消したっけ？あまり覚えがないなあ
まあ．．．さすがにハルジオンのは覚えてるけどね

「貴様等ア．．ワシは評議員に怒られてばかりじゃぞ．．．」

『．．．．．』

「じゃが・・・評議員なんてクソくらえじゃ」

マスターは火の魔法で評議員からの文書を全て燃やして投げ捨ててしまった。

それをナツが空中でキャッチ！ナツすごいケドそれじゃもう犬だよ

「よいか・・・理を超える力はすべての理の中より生まれる。魔法は奇跡の力なんかではない我々の内にある『気』の流れと自然界に流れる『気』の波長があわさり、はじめて具現化されるのじゃ。それは精神力と集中力を使う。いや己が魂すべてを注ぎ込むことが魔法なのじゃ。上から覗いてる目ン玉氣にしたら魔道は進めん。評議員のバカ共を怖れるな。自分の信じた道を進めェい！！それが妖精^{フェアリー}の尻尾^{イテイル}の魔導士じゃ！！！！」

『オオオオオオオオオ！！！！』

）数時間後）

はい、今は夜です。俺はカウンターでパフェ食ってます。もちろんミラが作ってくれたやつ。なぜか俺の隣にルーシィが座っていて、ミラと話している・・・

「そういえば（もぐもぐ）ルーシィはギルドマークつけたの？」

「なにギルドマークって？」

「うーん……えっとね……」

「私が説明するわ。ギルドマークって言うのはね……」

〽数分後〽

「へーそれあたしもつけたいな」

「じゃあ今つけばいいじゃん」

「え！もうつけてもいいの？」

「じゃあ今つけちゃいましょうか……何色がいい？」

「じゃ……ピンクで！」

「お！ルーシィも女の子らしいところあるね」

「そ、そう？／＼／＼／」

ん？何で顔が赤くなるんだ？よく分からないがとりあえず今はパフ
エ、パフェ♪糖分取らないと仕事できないし

ゴソゴソ「あったわ！じゃあどこにつける？」

「ん〜じゃここでっ！」

ルーシィは右手の甲を指差した

「ここでもいいのね？」

「はいっ！ー！」

ポンッ

「はいっ！これであなたも妖精フェアリーテイルの尻尾の一員よ！」

「わぁ♪」

「見てー！ナツ！妖精の尻尾のマーク入れてもらっちゃった♪」

「よかったなルイーージ」

「あたしはルーシィよ！！！」

「お前あんなカワイイ奴どこでみつけてきたんだよぉ。まさかライトのあれじゃないよな」

「いいなあうちのチームに入ってくんね」かな。まあライトのあれだったら無理かもしれないけど」

「さて仕事行こうかな。金なくなったし。ライトお前もいくか？」

「ん？（もぐもぐ）俺はパス」

俺とナツは別にチームを組んでるわけじゃなくて、この間はたまたまナツと行くところが同じだったから一緒に行っただけです。この前みたいに街壊されたら困るからね」

またナツと仕事に行ってもしナツが何か壊したら評議員とかが、絶対俺に『何で止めなかったんだ!』とか『お前さんが一番近くにいたじゃろ!』とかいろいろ言われそうだから、あんまりナツと仕事に行きたくない………それに今は糖分摂取中だ!!!

「父ちゃんまだ帰ってこないのかよ?」

「む」

「くどいぞロメオ貴様も魔導士の息子なら親父を信じておとなしく家で待っておれ」

「だって……三日で帰ってくるって言ったのにもう一週間も帰ってこないんだよ……」

ふむ……確かに遅いな。俺が見に行って来てやろうかな? あれってか俺、盗み聞きしてる?

「マカオの奴は確かハコベ山の仕事じゃったな」

「そんなに遠くないじゃないかっ!! 探しに行って来てくれよ!! 心配なんだ!!!」

「冗談じゃない! 貴様の親父は魔導士じゃろ!! 自分のケツもふけねえ魔導士なんぞこのギルドにはおらんじゃあ!! 帰ってミルクでものおれい!」

「.....」

「バカーー!!」

「おふっ」

ロメオとかいう少年がマスターを殴って出たよ.....
マスターは平然としてるけど痛くないのかな?

「厳しいのね」

「ああは言っても本当はマスターも心配してるのよ」

「.....」

ズシッ

ナツがリクエストボードを殴ったようだ。いつものように思えるけどナツの表情が違うな……

つか　つか　「オイイイ!! ナツ! リクエストボード壊すなよ!!」

カチャ

俺はパフェを丁度食べ終わりスプーンを置いた

「ライトどこに行くの？」

「……ちょっとね」

「あいつ等マカオを助けに行く気だぜ」

「コレだからガキはよ……」

「んなことしたってマカオの自尊心がキズつくだけなのに」

「進むべき道は誰かが決める事でもねえ・・・放っておけい」

（翌日）

今、俺達は馬車に乗ってハコベ山に移動中です。そしてなぜかルー

シィまで着いてきた

「でね！あたし今度ミラさん家に遊びに行くことになったの♪」

「下着とか盗んじゃ駄目だよ」

「盗むかー！ー！」

第10話 ギルドマスター（後書き）

ちょっと変な終わり方でしたけどまた長くなってしまったので仕方がありません

次の更新は・・・・・・・・何時になるか正直分かりません。
でもなるべく早く更新します

第11話 マカオを探して・・・（前編）（前書き）

また更新遅れてしまつてすいません。

今日はちょっとゆっくり話が進みます

第11話 マカオを探して・・・（前編）

「ルーシイうるさい・・・」

「あ、ごめん起こしちゃった？」

今、俺達は遭難？したマカオを探しに来ている。場所がハコベ山だからなく。ハコベ山は夏季でも雪降ってるらしいからな。俺以外、皆薄着なんだけど大丈夫かな？まあナツは例外かな？ドラゴンみたいなもんだし・・・問題はルーシイかな。絶対『寒ーっ！』とか言うよねっ？うんうん

「そういえばさ・・・」

「「何でルーシイがいるんだ？」」

「な・・・なによ？なんか文句あるの？」

「そりゃもういろいろと・・・」

「だってっせつかくだから何かフェアリーテイルの役に立つことをしたいなっって」

俺は思う・・・絶対ルーシィは株を上げたいんだとっ！

「それにしてもあんたほんとに乗り物弱いのね」

カタ カタ カタ 「うつ・・・」

「何かいろいろと可哀想・・・」うるっ

「は？」

「マカオさん探し終わったら家探さないとな」

「おいらとナツン家でもいいよ」

「本気で言ってたんだったらヒゲ抜くわよ猫ちゃん」

「俺ん家でもいいよルーシィ」

「・・・」

「う・・・気持ちワリィ・・・」

しばらく無言が続いた・・・ん？あれ俺ちよっと、やってしまったヤツだなこれ・・・

カタ カタ カタ

ど、どうしよう、この気まずい空気! どうしたらいい?

「あ、あのさ・・・いまの冗談だからさ・・・」

「あ・・・そ、そうだね? 本当なわけないよね・・・」

「あ、あい・・・」

カタ カタ カタ

ガタンツ!

「ん! 止まったっ!!」 がぼっ

「ど、どうやら着いたようだな・・・」

・ ふー危ない危ない、あれ以上沈黙が続いていたらどうなることか・・・

「す．．すんません．．．」

「これ以上は馬車じゃ進めせんわ」

ヒュオオオオオオオオオオ

見るとそこにはハコベ山が雪に覆われていて、かなりの吹雪になっていた
やっぱり俺の予想どおり．．．．じゃないな、さすがに吹雪になっているとは思わなかった．．．

ヒュオオオオオオオオオ

寒い！．．．かも

「な、何コレ！？」

「いくら山のほうとはいえ今は夏季でしょ！こんな吹雪おかしいわ
！」

「さ．．寒っ！！」

ふっ やっぱり俺の予想どうりルーシィは『寒っ!!』って言った
ね・・・それより・・・

「そんな薄着してっからだよ」

「あんたも同じようなもんじゃない!」

「ル、ルーシィバカだな」ガチ ガチ「ハ、ハコベ山は夏季でもゆ、
雪に覆われている山なんだぞ」

ガチ ガチ「お、俺みたいになっこうしないと風邪ひ、ひくぞ!」
ガチ ガチ

「う、ライトそのかっこうで寒いの?」

ガチ ガチ「え? ルーシィ何言ってるの? ほ、ほら俺の上着を貸し
てやるよ」

「あ、ありがとう／＼／＼・・・でもライトは寒いんじゃないの?」

「え? そ、そんなわけないじゃないか」ガチ ガチ

「ルーシィ、ライトはね寒いのが苦手なんだよ（小さな声で）」

「あゝだからあんなに着てるのに寒がってるんだ（小さな声で）
・（意外とライトもカワイイところあるのね）」

「ん？何か言った？ル、ルーシィ？」ガチ ガチ

「いいや何も？」

「そんじゃオイラは街に戻りますよ」

「ちょっとオ！！帰りはどうすんのよー！！！」

「あいつ本当にうるさいな」

「あい」

「おゝゝいルーシィ行くぞ！」

「え！い、いつのまに！？」

そう、俺はついさっき、かなりの厚着に着替えたのだ。ざっと10枚ぐらいかな？

ヒュオオオオオオオオ

「うう・・寒いな・・・そうだっ！ひ、開け・・と、時計座の扉・
・ホロロギウム！！！」

パッポー！

ルーシイが魔法を使って時計？とにかく変なのが出てきた・・・

「おお時計だ！」 「あい！」

「な、なにそれ？」

あ！そういえばルーシイ星霊魔導士だったんだよね。すっかりわすれてたよ

「『あたしここにいる』と申しております」

「何しに来たんだよ」

「『何しに来たと言えばマカオさんはこんな場所に何なの仕事に来たのよっ!？』と申しております」

「あれ？ルーシィ知らなかったの？あれだよあれ……猿だよ猿！」

「おいおいライト、おめえすこし間違ってんぞ！凶悪モンスターバ
ルカンの討伐だぞ！」

んゝまあ猿はあつてゐるなうん、そんなに強くないだろあれは……
きつとマカオは遭難だ！

「『あたし帰りたい』と申しております」

「はいどうぞと申しております」

「あい」

「えー！ルーシィここまで来たのに帰るの？」

「『うーん、じゃあライ「あー！それ以上言っちゃダメー！っ！」・・・と申しております」

ん？今なんて言おうとしたんだろ？まあ俺には関係ないか

ヒュオオオオオオオオオ

「マカオー！！いるかー！！」

「遭難したのかー！！」

「バルカンに食われたのかー」

・・・ツツコミがないと何か成り立たないな・・・ルーシイ
出てきてくれよ・・・

ガサ ボス

ボス ボス・・・

上の方から変な音がするなく明らかに『コソコソ』的な効果音がするな・・・これは怪しい

ガサ ガサ ボスツ・・・

ばっ

！！！！ 俺はさっきから変な音に気づいていたが、やはり・・・おい
でなすった！！こいつが猿だバルカン！！

ドゴオオオオン！

ナツは宙返りしながらバルカンの攻撃を避けて

俺はふつーに後ろにジャンプバックして避けた
通過ぎるかな？)

↑
(普

「バルカンだー！ー！！」

「ウホオ！」

「ぬお！」

「あれ？何でだ？」

バルカンは俺達（俺、ナツ、ハッピー）の方には攻撃してこないで、
まったく見当違いの方向へ向かって行った。たしかそっちには・・・

「!？」

「人間の女だ♪」

「うほほーーーーー♪」 キャーーーーー

バルカンはなんとルーシィ（人間の女）を連れて行ってしまった。
意外とスケベなんだな・・・

「しゃべれんのか、あのサル！」

「あゝあルーシィ誘拐されちゃった」

「あい」

「『ってか助けなさいよオオオオ!!』と申しております」

第11話 マカオを探して・・・（前編）（後書き）

別に漫画に合わせようとするつもりはないのですが今回もたまたま漫画と同じところで終わってしまいました

次回の更新はなるべく、な・る・べ・く早くしようと思います

次回は遭難したマカオを救助、誘拐されたルーシィを救う！という話です

→うそです

第12話 マカオを探して・・・（後編）（前書き）

・・・・・・・・最近この小説が変な気がしてきた・・・・・・・・そう何かが変

まあとりあえず・・・・・・・・

第12話 マカオを探して・・・（後編）

「たつく・・・ナツ、ハッピー！早く追うぞっ！」

「おう！」 「あい！」

俺達はとりあえず先ほどバルカンに誘拐？されたルーシィを追うことにした。

すると・・・

ドドドドド・・・

ん？何の音だ？

ドドドドドドドー！！！！

「や、やばい雪崩だ！ハッピー！ナツをもって飛べっ！」

「あいさー！」

「おいライト生きてるか」「か」

「お前等、絶対俺のことあんまり心配してないだろ……」

「あ！生きた」

「お前等酷くないか・・人が雪崩に飲み込まれたのに」

「だってーライトそんなぐらいじゃ死なないじゃないか」

「ま、確かにそうかもしれないけど・・さて、改めましてルーシイ探しに行くとか！」

俺は雪崩の中から体を抜き出そうとしたら

「あれ？ 抜けない・・・なんでだ？」

「おいどうした？ 早くルーシイ見つけに行くぞ」

「いや・・・それがなぜか抜けないんだよ・・・」

「「プツ（笑）」」

「わ、笑うんじゃねえー！ と、とにかくお前等は先にルーシイ探して来い（あとマカオも）！」

「わかったよ！」 「あいさー！」

ナツとハッピーは猿とルーシイが向かった方へ走って言った・・・

ふう行ったか・・・それにしても何で抜けないんだ？・・・やべっ泣きそう・・・そして・・・寒っ！！

そのころルーシィは・・・

「開け金牛宮の扉・タウロス!!!!」

「MO――!!」

ルーシィはどうやら戦闘中のようにだ

「ウシ？」

「あたしが契約している星霊の中で一番パワーのあるタウロスが相

手よ!」

「タウロス!!!」

「MO——!!!」

「ウホオ!!!」

バルカンタウロス
猿と牛の戦いが今、まさに始まろうとしていたっ!

が
・
・
・
・
・
・

「なんか怪物増えてるじゃねえか——!!!」

「MOふっ」「ウホオ!？」

「ぎゃあああああ!!!」

いきなりナツが現れ怪物を飛び蹴りで一発KOしてしまった

「MO・・・ダメっばいですな・・・」

「弱ー弱ー!!」

「ってかナツ来るの遅いわよっ!」

「あ!悪い、悪いあの後、雪崩に遭ってさ」(それ普通に言うことかしら!?)「それでライトが雪崩に巻き込まれていろいろあつて遅れちゃったんだよ」

「・・・ライトは・・・」

「ん?」

「ライトはどうしたのよおおお!!」

ルーシィはライトを心配し、ナツの肩をすごい勢いで揺さぶる

「うおおお！？お、落ち着け、落ち着けて・・・ライトは生きてんぞ、ちゃんと」

「本当？」

「ああ本当だ！」

「あーーーーー！！」

「ど、どうしたハッピー、急に大きな声だして・・・」

「ナツーーー！おいら今思い出したんだけどさ・・・ライトって寒いのにガテじゃん」

「「あ！」」

「もし、ライトがあのまま雪に埋もれたままだったら．．．．．」

3人の頭に最悪の光景が広がる．．．．

ヒュオオオオオオオオオ

『う．．．．寒い．．．寒いよお．．．もうだめ．．だ．．．．寒
く．．て．．死．．．ぬ．．』

「や、やべえ！早くマカオ探して、この猿倒して、ギルドもどって、飯食って、ライト助けねけと！」

「あ、あい！」

「優先順位が明らかに違うんですけど……」

「ウホオ！ゴチャゴチャウルサイ！」

するとバルカンは一柱をナツ達に向かって投げてきた

「うるせえのはてめえだ！火竜の咆哮！」

一柱はすべてナツのブレスで溶けてなくなってしまふ……奥にいたバルカンも少し食らってしまう

「ウ、ウホオ」

バルカンの頭が少し黒コゲになっている

「早く退かねえと全身黒コゲになるぞ」

「ウホオオオ！」

「ウホ！」

バルカンが近くにあった武器をとった……それは

「あ！それタウロスの斧！」

「キエエエエエ！！」

ブオンッ

「わっ！」

ブオン ブオンッ

「うおっ」

ブンッ

「危・・・」

つるん

「「あ！」」

ドテン！

ナツは床の氷に滑り尻餅をついてしまった

「ウホオオォー！！！」

ナツに斧が迫る・・・

「ナツーーーー!!!!」

「マカオは何処だゴラー!!!!」

「ウホオオオオオ!?」

そこに現れたのは・・・なんとライトだった!

俺は『ウホウホ』うるさい猿に闇の魔法を脚に付加させたとびつきの飛び蹴りを食らわしてやったぜ

ズガア

見事にバルカンは氷の壁にぴったり挟まった

「「「ライト！」」」

「あ！わりい獲物取っちゃったなナツ」

「それより、ライトよく生きてたわね。雪崩に遭ったのに……」

おいおい、そんなに俺は甘く見られてるのか？

みみみみ

「おー！何かこの猿、光出したぞ！」

「「え！？」」

みみみみみ

だんだんその光が大きくなっていく・

みみみみみみみみ

「おお！！進化すのかな！？」

「しないわよっ！・・・・たぶん」

ん？進化？どこかで聞いたことあるような・・・？

ボウウン！

「「「「！！！！」」」」

「猿がマカオになったー！」

「え！？この人がマカオさん？」

いやーでも進化しなくて良かったー！
進化してたらマカオ帰ってこれなくなるところだったなーうん、うん

「バルカンにテイクオーバー接收されてたんだ！！」

「テイクオーバー接收？」

「ルーシイそんなのも知らないのか？テイクオーバー接收は体に乗っ取る魔法だぞ
！！！」

「へ、へ」

俺がルーシィにのんきに喋ってると・・・・・・・・

ずり・・

ずるんっ

あー！！マカオが落ちるっ！

「あーーーーーっ！」

俺は光の魔法を脚に付加させ高速でマカオに追いついた・・・・・・・・
だが勢い余ってそのまま向こうに行ってしまった

俺の脚にナツがしがみつき、ハッピーがナツの脚にしがみつく

「さ、3人も無理だよー！羽も消そうっ」

「く、くそおおお！」

「んっ！！」がしっ

「「ルーシイ！！」」

「お、重い・・・お、落ちるっ！」

た、確かにもうやばい・・・・・・・・すると

がっしり

「MO大丈夫ですぞ」

「タウロス！！」

「牛ーーーー！！いいやつだったのか・・・」

あれ？よく考えたら俺が魔法使ってもいけたな・・・・ま、いつか！

「テイクオーバー接収される前に相当激しく戦ったみたいだね」

「ヒドイ傷だわ」

「マカオ！ロメオが待ってんぞっ！」

「マカオしつかりしろ！！」

たしか前にバルカンは人間をテイクオーバー接収していきつぐモンスターだって聞いたことがあるな・・・でもまさか本当だったとはな

「わき腹の傷が深すぎるな・・・」

「持ってきた応急セットじゃどうにもならないわ」

むう・・・俺は治癒魔法なんて使えないからな・・・どうしたらいい！？

ボツ

するとナツは手に炎を付加させた・・・何をするんだろう？そう思
いながらみていると

「ちょ・・・」

じゅううううううう！！

「ぐわあああああ！！！！」

「な、何してんのよっ！！」

ナツはマカオの傷の深いわき腹に炎をあてた

「今はコレしかしてやれねえ！！ガマンしろよマカオ！！！！」

「あぐあああっああ！！！！！！」

「ライト！ルーシィ！マカオを押さえろっ！！」

「は、はいっ！」

・
そうか！火傷させて傷口を塞ぐのか！それで止血をしてるのか・・・

「死ぬんじゃないぞ！！ロメオが待ってんだ！！」

「ふがっあっぐあっ」

！！！！！！何？なんだ？この感触は！？腕に何かが・・・

見るとルーシィの・・・胸だった・・・え！！こんなときにー

――!! 何してんのルーシィ!!?

ん? いや、わざとじゃなくてたまたま当たってんのかなもしれないな・
・・・と、とりあえず

今は黙つとこ・・・

「くそ・・・情けねえ・・ハアハア19匹は倒し・・たん・
だ」

「え!!」

「うぐつ・・20匹目にテイクオーバーに接収・・されて・・ぐはっ」

「もう分かったから喋るなっ!!」

「お、おいつマカオ! 傷口が開くだろうが!!」

マカオ・・・そんな仕事一人で行ったのか・・・・・俺は余裕・
・じゃないか・・・寒いし

そんなことよりまだルーシイの……胸が当たってる。しかもなぜか、すごくルーシイが驚いたような顔してんだけど……まさか！今きずいたのか！？自分のむ、胸が当たってることに……

「ムカつくぜ……畜生オ……これじゃ……ロメオに……会わす顔が……ね……くそっ」

「黙れっての！！殴るぞ！！！」

え！！今度は、なんか少し安心した顔してるんだけどルーシイ……なに？わざと？それともたまたま？くそっわかんねえ！！！！乙女心とかいうやつが分かんねえ！！

「時は流れ数時間後」

ここはマグノリアのある公園……

俺達は何とか、あの寒さを乗り越えマカオをロメオの元に連れて行くことが出来た

「父ちゃん……ごめん」

するとマカオはロメオにハグをした

ぎゅっ

「心配かけたな……スマネエ」

「いいんだ……俺は魔導士の息子なんだから」

「今度クソガキどもに絡まれたらいつてやれ……てめえの親父は

怪物19匹倒せんのか!? ってよ」

「うん!!」

「ナツ兄ー!! ハッピー!! ライト兄ー!! ありがとうーっ
!」

「あい!」「おー」「おう!」

「それと・・・ルーシィ姉もありがとうーっ!!」

いやーなんか親子の愛みたいのがみれて良かったな〜ほんとうに・
・・・俺もいつかやってやるっ!

たぶん・・・

第12話 マカオを探して・・・（後編）（後書き）

ふーっなんとか終わったー！

多分だけど、これから更新が遅れるかもしれないです・・・。

はい、それだけです

第13話 鎧の魔導士（前書き）

今回はオリジナルのお話です・・・

それだけです

第13話 鎧の魔導士

ザッ

ザッ

ザッ

ザッ！

「・・・ここか」

現在、俺は仕事で盗賊のアジトらしき所に来ている。ん？何故ナツとハッピーとルーシイが居ないかって？それは俺がナツの仕事の誘いを断ったからさ！だってあいつ等と居るとあまりろくなことがない気がするし、ナツは乗り物に酔うし、ナツとハッピーが『ご飯おごってくれ』とか言ってくるし、とにかくっ！あいつ等と居るとろくな事がないのだっ！！でも俺のマナーが底を尽きそうだったので、とりあえず一人で仕事に行くことにしたんだ。そして現在に至る

「さてと・・・とりあえず中へ入りますか」

盗賊のアジトなのかは、分からないがとりあえず俺は中に入ることにした。

少し大きな扉を開けると、中は建物の外見より意外と広々とした空間だった。部屋のほとんどの所は薄暗いのであまりハッキリとは人の顔が見えなかったりする。

『!?!?』

盗賊たちは俺が入ってきたことにすぐにきずいたようだ。

「おいっ! てめえ誰だ! ここは盗賊のアジトだぞ!」

「てんめえ! ここに入って来たからには、ただじゃ帰さねえぞ!」

「ふ! ん、どうやらここは盗賊のアジトであっていたようだね」

「あ! ん! 何言ってるんだコイツ? ぶっ飛ばされ!」

ドーン

俺の目の前に来たヤツが邪魔だったから木刀でぶん殴ってやった。
これが面白いようにメツチャ吹っ飛ぶだよね

「!?!? てめえ生きて帰れると思うなよ! やっちまえ!」

『オオオオオオ!?!?』

大勢で俺に襲ってきたが、そんなんじゃ俺には敵わないよ

ドカーン

『うわあああ！！！！』

俺は闇の魔法を空中に浮かして小爆発を起こした。すると俺に襲い掛かってきた敵が全て吹き飛ぶ。

な～んだ、やっぱこの程度ですか～

「て、てめえ何者だっ！」

「ん？俺はねえ……フェアリーテイルの魔導士だ！」

「魔導士が盗賊に何のようだっ！」

「ん～あれだよ……仕事だよ」

「つくそ！だが……ふっふっふ……こっちには、まだまだたくさん仲間がいてねえ」

確かにかなりの数の盗賊どもがいる、ざっと60人ぐらい？・・・
入ってきたときより増えてね？

「いくぞオラアアアア！！！！」

『オオオオオオオ！！！！！！！』

一斉にたくさん盗賊達が襲ってきたのでとりあえず・・・木刀を
斬刀化した

そして、斬って・・・斬って・・・斬りまくるっ！

自分で言うのもなんだが、盗賊たちの血がドバドバと吹き出ててグ
ロイです・・・

ズシャン ズバンツ

ドバアア ドバアア！！

「ぐわあああ！！！」

「ギャアアア！！！！」

「ひひひひひ！！！」

ザンツ ズバアア ギシヤアア ズババン！！

そして魔法を使わずに敵の数を3分の2程度までに減らせた

「う、うわぁ・・・」

「つ、強すぎる・・・」

「これが・・・フェアリーテイルの魔導士か・・・」

「ちっ！く、くそつたれがアアア！！」

ボスらしきヤツが自ら俺に攻撃してきた・・・が

ズバン！！

「ぐわぁぁぁ！！」

はい・・・一発KO！

「な、なに！！？」

「ぼ、ボスが・・・一発で」

「やられちゃった？？」

「に・・・・・・・・」

『逃げろオオオオ！！！！』

入り口から盗賊たちが逃げようとしているので、すかさず入り口を塞ぐ

「はいはい・・・俺はお前等を捕まえるのが仕事なんだから逃げんよ・・・・・・・・」

「く、くっそ！」

「こ、こうなったらこの魔導士を殺^やっちまえー！！！」

『うおおおお！！！！』

そろそろ面倒なので・・・・・・・・この一発で・・・・

俺は木刀の先に闇の魔法を球体状にしたものを・・・・・・・・盗賊どもに・・・・・・・・打っ！！

闇の破滅!!!

ドッカーーーーン

『ぐわあああああ!!!』

とたんに大きな爆発が起きて盗賊たちが全員吹っ飛んだ

「う・・・・・・・・」

「く、くそお・・・・・・・・」

盗賊たちは皆、床にへばりついていた。もう皆戦えないようだ

あゝあ、やっぱりすぐ終わっちゃうんだよな。やっぱり今度はS級クエストにでも行こうかな？

盗賊達のことは既に軍隊に知らせてあるので、あと少ししたらお迎えが来るだろうから、ほっとしても大丈夫だろう。

「さあて俺は帰ろうかな？盗賊の皆さ〜んあと少ししたらお迎えが来るので、絶対大人しくしてろよっ！！もし逃げたらただじゃおか
ないぞ？」

『お、大人しくしてま〜すっ！！・・・』

俺は盗賊のアジトを去った・・・

と言っても、もう建物が跡形もなく消えてるか・・・ん？これ
って俺のせいなのか？

盗賊のアジト周辺はもう滅茶苦茶になっていた

帰りはのんびり森の中を歩いて帰るつもりだ。けどここからギルドまで歩いたら数日かかるな・・・まあ、のんびり行こうかっ！

（数時間後）

にしてものどかな森林だな・・・・・・すごく平和だなうん、平和

そんな事とか考えながら歩いていると

ガサガサ

ガサガサ

目の前の草むらから明らかに『ガサガサ』いつてる……熊かな？ 危なそうなので身構える俺

ガサガサ

ガサガサ……

バツ！

熊かつ！！と……思ったが違った……

「ん！！ラ、ライト！！！」

「びっくりしたな〜エルザかよ……」

そう、草むらの中から現れたのはエルザだった。まあ確かに熊のようには凶暴だけど……

「『エルザかよ……』とはなんだっ！……と、ところでこんな所で何をしているんだ？」

そういえば、エルザからのツツコミってあんまりないよね〜じゃあ今のツツコミはレアもの？

「俺は・・・仕事帰りだよ。エルザは？」

「私は仕事の途中だ」

「そういえばさエルザ最近ギルドに戻ってなかったよね？」

「この仕事で何日もギルドに戻れてないんだ・・・」

「よかったら・・・俺も手伝おうか？」

「・・・！！！！て、手伝ってくれるのか！？」

「ああ・・・暇だからな、ダメか？」

「／／／／・・・っ！！よ、よしじゃあ・・・手伝ってくれるか？」

ん？何かエルザの顔が・・・？？ま、気にしないで置こう

「おう！」

ちなみに俺はエルザと一緒に仕事をしたことは少なかった。だが小さい頃はよく一緒に行ったな。今とは違って、小さい頃は恐ろしくはなかったし、どちらかと言うと可愛かったかもしれない・・・？

「そういえば何の仕事してるの？」

「私の今している仕事は魔物討伐だ」

やっぱりな・・・だってエルザそんな仕事してそうだもん。子供の頃一緒に仕事行ったときも魔物討伐の仕事が多かったもんな

「お前今『やっぱりな』みたいな顔をしてたな？」

「・・・っ！！ばれたか・・・それより早く行こうぜ」

「ああ！」

俺は森の中を歩きながらエルザの今回の仕事内容について聞いた。この近くに小さな村がありその村によく大きな角のモンスターが襲ってくるらしい。そのモンスターを討伐して欲しいのだという。と

にかく大きな角のモンスターなのですぐに分かるらしい。だがエルザがいくら探してもそのモンスターは見つからなかったらしい。それで何日も仕事をしていたのだという……。

俺は思ったがエルザはきつとずっとこの森の中を迷っていたのだと思う。小さい頃もよく迷っていた気がしたし……

「……さて、この木はさっきも」

「見たな……」

「絶対エルザさこの仕事している間ずっとこの森の中迷っていたよな？」

「……まあ薄々きざっていたが」

「はあとりあえず高いところに行つて、その角のデカイモンスターを探そうか」

「ああ……」

「お前疲れてそうだから今日で終わらすぞ」

「……!!それは無理だ!私は何日も探したんだぞ!もし仮に私が方向音痴だとしても……」

俺はエルザが方向音痴だと思うけど？

「この森はとても広いんだ！村長さんが言っていたんだ。この森を全く知らないお前が一日で一匹のモンスターを探すなんて無茶だっ！」

「……エルザ……大丈夫だ俺に任せろ……！！」

エルザの頭の上に軽く手を置く

「……／／／／！！」

「お前は方向音痴だけど、俺は方向音痴じゃないから！」

「ば……バカ者！……と、とにかく行こうか」

〱数十分後〱

意外と近くに高い山があったので、すぐに着いた。

あたりを見渡してみたが角のデカイモンスターの姿はない。

「全く見当たらねえ」

「さて、どうするんだ？」

「もう、エルザも何か考えてよ・・・」

「ん〱そうだな・・・！！ライト、お前飛べるよな？」

「ああ、まさか・・・飛んで探せっか!？」

「だって・・・それしかないだろ？」

エルザは簡単に言うけど、このかなり広い森の中を俺が飛んで探せっ
つてなると、俺の魔力が・・・と言っても俺の魔力は何故だか、

かなりあるので、あまり心配はないが・・・

確実に・・・・・・・・疲れる！！

「・・・・・・・・・・はぁ・・分かったよ探してくりゃいいんだろ！探してくれば！」

「私はここで待ってるから・・・・ゆっくり探して来い」

「へいへい・・・・」

俺は渋々と闇の魔法で翼を作ってエルザの元から離れた。まあゆっくり探してもエルザは怒らないだろう・・・・たぶんな。

その後、角のデカイやつを探し続けたが全然それらしモンスターは見つからなかった・・・・とりあえずエルザの居るところに戻りました。

ガキイン

ガキン

ガキン

「ん？この音は何だ？金属音かな・・・」

エルザの居たところから音がする・・・

少し気になったのでスピードを上げてエルザの元へ向かった

第13話 鎧の魔導士（後書き）

何故か今回はスラスラ書けたな・・・まあどうでもいいことです
ね。すいません

第14話 巨大モンスターの討伐！（前書き）

結構この小説も最初の頃より人気が上がってきてる気がします。うれしいです！

そして読者の皆さんこんな小説見てくださってありがとうございます！

4万PV突破！………しました！！

第14話 巨大モンスターの討伐！

俺は急いでエルザの元へ向かった・・・

キン ガキイン！

「え、エルザ！？何してんの！？」

「ライト！！コイツはおそらく今回のクエストのモンスターだっ！」

あゝ結局俺が探しに行った意味ないじゃないか・・・俺ただ単に疲れただけじゃなか

それよりコイツだな、確かに角がデカイ・・・って体もデカイじゃねえかアアアアア！！？

姿はトカゲとワニのミックスみたいだが恐竜という太古の動物にも似ている。角は頭に立派にデカイのが付いている

「ライト！そこでボーっとしてないで手伝え！！」

「わ、分かったよ！！」

「ギャオオオオオオオン！！！！」

「行くぞっ！」

「おう！！」

俺とエルザは巨大なモンスターの討伐を始めた！！

エルザが天輪の鎧に換装して、俺は木刀を取り出し斬刀化した

「はあああっ！！」

「うおおおおお！！」

ズバンツ ギシヤアアア

「ギャオオオオオオオオ！！」

!!?

俺とエルザの攻撃が……血は出ているのだがあまりダメー
ジがないみたいだな

ふっ、久しぶりに骨のある仕事だぜっ!!

「エルザ!!」

「ああ!」

俺は木刀全体に闇の魔力を付加させ、エルザは・
循環の剣サークル・ソードだ

「闇の波動『改』!!」

「サークル・ソード循環の剣!!」

ドカーカーン

「ギャオオオオオオン!!!!!!」

よしっ！これはさすがに効いたみたいだな

「『ギロリ』」

「「!!?」」

「グオオオオオオオン!!!!!!」

ボオオオオオオオ

あいつ炎を吹きやがった!!まるでナツみたいだ!

「闇の盾！」

ふーっ間一髪セーフだな・・・エルザもまさか口から炎出すとは思
ってもなかったんだろうな、エルザはかわせなかったみたいだ

「あ、ありがとう」

「それより！目の前の敵に集中！」

「グオオオオオオオ！」

コイツ結構強いな・・・

「換装！」

「・・・・・・・・じゃあ俺も少々力を出しますか！！」

エルザが黒羽の鎧に換装したので、俺は木刀の闇の魔力を増加させた

「グオオオオオオオ！」

するとヤツは俺達に突進してきた

けど・・・エルザは高々とジャンプでかわして、俺は光の魔法を脚に付加させ、エルザとは逆の方向にジャンプした

モンスターはエルザと俺のことを見失ったので、キョロキョロと辺りをさがしてる

「はああああっ!!」

「!!!!」

ようやく、エルザにきずいたようだが、もう遅い……!!!!

ズバアアアアン!!

「ギャオオオオオオン!!」

エルザに思いっきり斬られたので相当痛がつている

「いまだっ！ライト！！」

「おうっ！」

「これで止めだ！闇の破滅！！」

ドーーーーーン

「ギャオオオオオオ！！・・・ン・・・」

ドサッ

あいつは俺の攻撃をもろに食らったので倒れた

「ふーーーーっ!! やつと終わったよ……」

「ライト……これはやりすぎじゃないか？」

「ん？ 何………」

見ると俺が攻撃を放った所はまるでクレーターみたいになっている……
……たしかにやりすぎたかも？

「まさかライト……いつも仕事先でこんな風にしてるのか？」

え、エルザ……様が恐い!!

「い、いやーそんなことない……ですよ。たまたま今回はこうなってしまっただけで……」

「そうか……ならいいんだ……だが何故敬語？」

「え!?! 俺が何時敬語になったって?」

「・・・・・・・・まあいい。とりあえず村のほうへ戻ろう」

「おう・・・・・・・・でも何か証拠とかなきゃダメじゃね？」

「それなら心配ない。コイツの角を持っていこう」

「・・・・・・・・ああ」

これを持って行くのか・・・・・・・・やっぱりエルザはかわってるな・・・・・・・・

〽数時間後〽

何度か道に迷ったりしたけどなんとか村に着いた。結構小さい村である

今はかなり広い村長さんの家の中で村人全員集合して話している

「いや、本当にありがとうございます」

「いえいえ」

村長さん・・・何回『ありがとうございます』って言ってると思っ
てんだ？もう9回は言ってるぞ

「あなた様がしばらく帰ってこないのでも心配しましたよ」

「ああそれはすまなかった。ずっとモンスターを捜していたんだ」

いやエルザちょっと違うぞ、エルザはずっと迷ってたんだ！そして
エルザはきつと方向音痴なんだ！

「そしてそのお方は？まさか・・・あなた様のコレですか？」

村長さんは小指を立てて俺達に見せる

「そ、それは・・・／／／／」まさか、そんなことあるわけ無
いじゃないですか。たまたま俺がエルザの仕事中にばったり出会っ
て、それで俺は仕事を手伝っただけですよ」

「そ、そうだったんですかそれは失礼しました」

「っ!!」

何か足先に痛みを感じたので足を見てみると、エルザが俺の足を踏んでいた・・・何コレ？

俺は黙っているみたいなの？

「この後はどうしますか？一応村に泊まる所がありますよ」

「じ、じゃあ村に泊まらせていただきます」

「あ！でも俺はかえ・・・っ!!」

エルザは俺の足をさらに強く踏んできた。とても痛いです・・・

「ん？どうされましたか？」

「あ、いいえ何でも無いです」

「そちらの方も一緒に泊まりますか？」

「俺はk「はい！そうしてくださいっ!」・・・」

「わかりました、では・・・準備をたのんだぞ」

「はい」

「では・・・今夜は宴じゃアアア!！」

『うおおおおお!!!!』

そして俺は強制的に村に泊まることになり、さらに宴にも参加することになった・・・

帰ったらすぐ寝ようと思っていたのに・・・エルザのせいで・・・ぶつ　ぶつ

「ライト! 早く行くぞ! もう始まってるぞ」

「はあ・・・はいはい」

その後、宴は深夜ぐらいまで続いた

時は進んで現在、村の宿の中に居る

「はぁーっ！疲れた」

俺は今日のあまりの疲労に布団にダイブしてしまった。正直、ちょっと痛かったりもする

「今日は本当にすまなかったな、仕事を手伝わせてしまって」

「いやいや、俺は自分の意思でエルザの仕事を手伝ったんだから」

「そういえばそうだったな・・・」

「でもエルザも疲れたろ？何日もモンスターさがして・・・」

「確かに疲れてるかもな・・・そうだ明日、甘いものでも食べに行かないか？」

「！！！それいいね！よしっそれ行こう！」

「ふっふっふライトは甘い物には目がないな」

「それよりもう寝ようぜ、疲れたよ・・・あれ？てか部屋同

じなの？」

「……！（ら、ライトとお、同じ部屋でね、寝る……？）／／／／／」

「ま、いいやとにかく疲れたから寝る………おやすみ」

「お……おやすみっ……！／／／／／」

俺は深い眠りについた……

翌朝聞いたのだが、エルザはあまり眠れなかったらしい、理由は聞いてないけど……

第14話 巨大モンスターの討伐！（後書き）

しばらく旅行に行くので更新できないと思います。

次の更新は早くても土曜ぐらいになると思います

では

行ってきましたっす！！

いつも更新スピードが遅くてすいません！

第15話 仕事終了!そして帰還!..そして...始まり!..! (前書き)

すいませんっ!!

予定より少し更新遅くなってしまいました・・・

そしてだんだんこの小説が可笑しくなってきた気がする

第15話 仕事終了!そして帰還!そして……始まり!!!

「はい、出来上がりました」

何が出来上がったかって?それはあのデカイ角の装飾が出来上がったんだよ……。エルザがあの角を持って帰りたいとかいうから村人があのデカイ角をわざわざ装飾してくれたんだよ。でもあの角を持って帰るなんて本当にエルザはかわっている……

「すまないな装飾までしてもらって」

「いえいえ」

「この角はうちのギルドに飾らせてもらおうでしょう」

「おいおいエルザこんなもの「お前は黙っている!」はいっ!!」

「……………ではそろそろ、おかえりになられるのですね?」

「まあそうだな」

「では村人を全員集めますので、村の出口でお待ちください」

よしっ！やつと帰れるよ・・・まったく

昨日、エルザのクエストに助太刀して分かったけどエルザには助太刀はいらないな・・・

やっぱり俺は面倒そうなことには首を突っ込まないようにしておこう

「おいライト！何をしているんだ早く行くぞっ！」

「あ！そうか、そうか忘れてたよ。よし、じゃあ早く行こうか（よっしゃアアアアア！！久しぶりに甘い物を食べるぜ！！♪）」

（数分後）

村の出口（大きな門）の前に行ったら既に村人が全員集合していた

「魔導士殿、今回は本当にありがとうございました！」

『ありがとうございます！！』

「これで村も救われました本当にありがとうございます。ではこちらの報酬金を受け取りください」

村長がエルザに渡していたのはなんと！70万J……ぐらいだった！！

いいなあ～～俺も欲しいな～～

「言っておくがライトにはやらんぞ。これは私のケーキ代だ」

「わ、わかってるよそんなこと（おいおい！エルザはどれだけケーキを食べてるんだ？まあ俺も甘い物は結構食べてるけどね）」

「帰るぞライト」

「はいはい」

「魔導士どの～～！！ありがとうございます！」

「またいつでも来いよ～～！！」

「ライトとかいう男～～！！その嬢ちゃんとうまくやれよお～～！！」

「…………／／／／」

「なんか余計なこと言ったやつがいたな…………ま、いっか早く

甘い物食べに行こうぜ!!」

「あ、ああ」

「ん? どうしたその角が重いのか? 何ならもってやってもいいぞ?」

「!! い、いや結構だ!」

「そ、そうか・・・」

俺達は村を後にして近くの酒場によって甘い物を食べることにした
いやゝでもあそこは危ないやつが結構来たりするからなゝゝ集中し
て食べれなかったりしないよな?

しばらく歩いて街に出た・・・たしかここはオニバスだったかな?

「はあゝゝやつと着いたああ!!」

「何だライト? もう疲れたのか? そんなに歩いてないじゃないか?」

「もう・・・とにかく俺はすぐにでも甘い物が食べたいですつ!
!」

「じゃあ早速中に入るか・・・」

「!! ちょっと待ってエルザ!」

「ん?なんだ? 早く甘い物が食べたいんじゃないのか?」

「う・・・まあ確かにそうだけどっ! エルザその荷物はさすがに
お店の中には入りません!!」

そうエルザの荷物はとてつもなくデカイ! 高さが2mぐらいあって
横幅もかなりあるし普通の扉じゃ、まず入らないね。しかも荷物の
多さは今回に限らず毎回毎回荷物が多いのだ! いつもそんなに何を入
れてるんだろ?

「じゃあどうしろと言うんだ!? 私の荷物が盗まれてもいいのか!
?」

「いや〜でもどうやってもその状態じゃ入らないでしょ! だから店
の入り口のところに置いておけばいいじゃないか?」

「そんなことしたら私の荷物が全て盗まれてしまうじゃないか!!」

「ん〜じゃあ誰かに見張ってもらえばいいんじゃないか?」

「あ!! その手があったかっ!!!!」

現在この場には、まともなツツコミが居らず会話に違和感があるの

を二人は気がつかない……

「よし、じゃあ……おいっ！そこのお前！」

「へ？な、なんですか？」

普通に通行人Aみたいな何処にでも居そうな人にエルザは話しかけた

「まあお前に簡単な仕事をやってもらいたくてな……俺は早く甘い物を食べたいんだよ」

「いや……ちょっと俺これから用事が……」

「黙って私の話を聞けっ！」

「は、はい！」

「いいかお前は俺とエルザがその酒場に居る間、この荷物の見張りをするんだ」

「こ、この荷物って、このデカイ角と……」

「私の荷物だ」

「いいか？絶対これ誰にも盗られるなよ？」

「もし私の荷物が戻ってきたときに無くなっていたら……分かってるな？」

「は、はいいいい!! わかりました!! 荷物の見張りをすればいいですねっ!!!!?」

「そうだ! ただ見張っていればいいんだ」

「行くぞっ! ライト! ケーキが私達を待っている!!!」

「そうだな・・・!! 行こうか!!」

俺達は足早に店の中に入ってしまった・・・

「あの二人・・・明らかおかしくね?」

・・・通行人Aが独り言を言っていたことも知らずに

（店内）

もう俺達は既に席に座っていた

「ご注文は?」

「俺はとりあえず・・・ここにある甘い物全部くださいっ!! あとコーヒーも」

「私はショートケーキ10個ください。あと私もコーヒー」

「か、かしこまりました」

「てかさあゝ」

「ん？」

「俺達なんか間違ったこととしていたような・・・??」

「もうこの際気にするな、ケーキが食えるんだ」

「そうだな」

「お待たせいたしましたゝゝ」

来たっ! 念願の甘い物を食すときが!

「よっしゃああ!! いただきますああすっ!!!!」

俺はそこからの記憶があまりない・・・きっと夢中になって食べていたんだろうな

とにかく・・・

うまかった!!!

あまかった!!!

今、オニバス駅のホームに居る

「ふうふうまかったぜえ」

「ライト食べ過ぎてないか？」

「ん？そんなの気にしないゝ気にしない」

プシューーーーーッ！

どうやら列車がきたようだ

「よしっ！やつとギルドに帰れるぞおゝゝ」

ゝ数分後ゝ

ガタン ゴトン

俺達は今列車に揺られてマグノリアに向かっている

「う・・・・・・・・」

「ライトは乗り物ダメだったか？」

「い・・・・・・・・いや違う・・・よ・・・多分これ食いすぎたから・・・・・・・・」

俺はさっき、甘い物を食いすぎて・・・・・・・・吐きそう・・・・・・・・
・・・・・・・・かも

「はぁ・・・・・・・・だから食べ過ぎるなって言っただろ」

「え・・・・・・・・エルザア・・・・・・・・そんな事・・・・・・・・言っ
たア？」

「もう寝ていろ、つらいんだろ？」

「じゃあ・・・・・・・・お言葉に・・・・・・・・甘・・・・・・・・えて」

バタンツ

俺は深い眠りについた・・・・・・・・

夢だったか分からないが寝ている間
エルザの独り言のような声がずっと聞こえた・・・・・・・・気がした

くマグノリア駅く

「やっと帰ってきた〜!!」

「その調子だと復活したのか？」

「ああ! もう寝てスッキリしたよお〜」

俺は今日はギルドに行ってゆっくりしたら家に帰って寝るつもり・
・・・だった

「じゃあとりあえずギルドに戻るぞ」

「俺はその後家に帰って寝る〜」

「そうだな、明日に備えてゆっくり寝ろよ」

「ん? それどういう意味？」

俺は全くエルザの言ってる意味が分からなかった・・・

明日の出来事が
これから俺に起こる数々の出来事の始まりだということを俺はまだ
知る余地もなかった・・・

第15話 仕事終了!そして帰還!..そして.....始まり!..!! (後書き)

だんだん文章が減ってきている気がする・・・

次回の更新は早くなると思います

そして次回も文章は多分少ない・・・かな？

第16話 最強チーム!? (前書き)

最近更新スピードが落ちつつありますね・・・すみません

後書きにちよつと大事なお話があるので・・・

第16話 最強チーム!?

ただいまマグノリア駅から出てギルドに向かっている……エルザがあのだカイ角を持ちながら

ズシン ズシン

「てかさあゝその角本当にギルドに持って帰るの?」

「ん? 何だ、何か悪いか?」

『いやゝだってそれギルドに邪魔じゃない?』と言いたかったがこれを言ってしまうとエルザが・

「い、いやちょっと聞いてみたかったただだよ」

「そうか」

「さっきからなんか……視線が」

さっきから街の人の視線が……まあきつとエルザが持ってるデカイ角だろうな

「何か言ったか？ ライト？」

「いや何も？」

エルザとあれこれ喋っていたら何時の間にかギルドのところまで来ていた

ん？ 今ロキらしき人が見えたような？

とりあえずギルドの中に入ると・・・皆こっちを見ていた・・・
きつとこれロキのせいだな
あとエルザの持っているあのデカイ角だな・・・正直あれいらな
いんじゃない？と思う

ズシン ズシン ズシン

ざわざわ ざわざわ

ドシン！

「今戻った！マスターは居られるか？」

するとミラが

「お帰り！エルザ・・・とライトオ؟؟・・・マスターは定例会よ

後でライトからお話聞かないとね・・・（小さな声で）」

「そうか・・・」

「エ・・・エルザさん・・・そのバカデカイのは何ですかい？」

「ん？このことか？討伐した魔物の角に村の者が飾りをほどこしてくれてな・・・綺麗だったのでここへの土産にしようと思って・・・・・・迷惑か？」

「い・・・いいえ！滅相もない！！」

「討伐した魔物の角か・・・」

「すげえ・・・」

絶対皆、心の中で『あのデカイ角は邪魔!』って思ってるよな〜

うちのギルドの奴等は何時でもギルドの中で暴れてるから、あのデカイ角がその辺に飾ってあっても絶対すぐにギルドの奴等が暴れてあのデカイ角もすぐに壊れるだろうな〜って俺は思う

それにあれぐらいの角の魔物なんてその辺にわんさか居るだろ・・・

・多分

だからあのデカイ角はいらないと俺は思いますっ!!

けど・・・これをエルザに言ったら一体どうなってしまうのか・・・
・・・恐ろしい!!

「・・・それよりお前達最近悪さばかり起こしているらしいな・・・
・マスタが許しても私は許さんぞ!」

でた! エルザ恒例の説教タイム!!

「カナ! なんて格好で呑んでいる!」

「う・・・」

「ビシター! 踊りなら外でやれ!」

「ワカバ! 吸殻が落ちているぞ!」

「ナブ！相変わらずクエストボードの前をうろうろしているのか？仕事をしろ！」

「マカオ！」「う……」

「はぁ……」「な……なんだよっ！何か言えよ！」

「全く世話がやけるな、今日のところは何も言わないでおこう」

「……」「……」「……」「……」「……」

いつもエルザはギルドに戻ってきたらこうやってギルドのやつに説教してるんだよねー皆エルザが居ないときは滅茶苦茶騒いでるのね……

すると久しぶりの登場のルーシーが

「風紀委員か何かで？」

「エルザです！」

「よお！ルーシー久しぶりだな！」

「あ！ライト！何処行ってたのよ！あたしとナツとの仕事に誘おうと思ったのに！！」

「お、俺は仕事に行ってたんだよ・・・」

「し、仕事にいったのねーまあそれならしょうがないわね・・・」

「・・・にしては今回は帰ってきたの少し遅かったね」

「・・・それはアレだよ俺はエルザと「!!!!」と、ところで！
ナツとグレイはいるか？」・・・」

「あ、あい」

「・・・・・・」

ん??なんで今エルザは無理やり俺の話を止めたんだ???わから
んな・・・

それにハッピーが執事みたいになってナツとグレイの居場所を教え
ていたな・・・笑えるっ！

「よ・・・よおエルザお・・・俺達はきよ、今日も仲良くや・・・やっ
てるぜ」

「あゝい」

「!!!!ナツがハッピーみたいになった!!!!」

「あい」

「はっはっは！！やっぱり何時見てもコレはおもしろいねくつくく」

「そうか・・・親友なら時には喧嘩もするだろう・・・しかし私はそうやって仲良くしているところを見るのが好きだぞ」

「い・・・いや何時も言っただけで別に親友って訳じゃ・・・」

「あい」

「こんなナツ見たことないわ！！！」

俺も最初見たときはびっくりしたよ・・・そして爆笑！！しばらく何時間か笑ってたかも・・・

ナツはたしか昔、エルザに勝負を挑んでボッコボコにされたんだっけ。グレイは昔も何時も裸で歩いていたけど、エルザに見つかってボッコボコだ。あとロキも、エルザを口説こうとして半殺して聞いたけどな・・・ってなんか隣でミラが絵で説明してるけど、相変わらず絵が下手だな・・・料理はかなりうまいんだけどね♪

「二人とも仲が良さそうでよかった」

「実は・・・二人に頼みたいことがある。仕事先で少々やつかいな話を耳にしまった「え！？そんなのあったっけ？？」・・・
・本来ならマスターの判断をあおぐとこなんだが、早期解決が望ま

しいと私は判断した。二人の力を貸してほしい。ついてきてくれっ
な？」

「え!?!」「はいいい!?!?」

ざわっ

ざわざわ ざわざわ

「んゝゝとエルザ??俺そんな話聞いてないぞ?」

「お、お前は黙っている!?!」

何で・・・さ・・・エルザ・・・俺のこと、はぶいてるの?

「出発は明日だ準備しておけ」

「あ・・・いや・・・ちよっ」

「俺達が行くなんて言ったかよ!?!?!」

「詳しくは移動中で話す」

そしてミラが・・・

「エルザと・・・ナツと・・・グレイ・・・」

「？」

「今まで想像たことなかったけど・・・」

「コレって妖精の尻尾最強チームかも・・・」
フェアリーテイル

「！！！」

ざわざわ ざわざわ

ふむ・・・確かにミラの言ったとおり最強チームかもな・・・エルザはS級魔導士だしナツとグレイもそこそこ強いし・・・けどこいつ等、滅茶苦茶やってるからな・・・チームとして成り立たないかも？

「む・・・無理だ・・・コイツと一緒にだけでうぜえのにエルザが一緒なんて！！！」

「こんなチームありえねえええ！！！！つーか行きたくねえ！！！！」

ナツがルーシイのほうへ振り向き・・・ルーシイを睨みつける

「な・・・なによ」

「・・・おおおおお！！！！」

するとナツがルーシィに襲い掛かる！！！！とても素早い手さばきだ
っ！！

ってかナツ・・・犯罪だよそれ

「きゃああああ！！な・・・なにすんのよおお！！」

「お前今からナツだ！！！！」

ルーシィの姿がナツの服装になっていてナツが上半身裸だった。あ
の一瞬で・・・ナツすげえな・・・
いろんな意味で

「無理だって・・・」

「あい」

「じゃあ二人とも頑張ってね～～俺はもう今日は帰るわ～～」

「!!!! ちょっと待て!」

ギルドから出ようとしたが、エルザに服を引っ張られ中に強制的に
戻される

「な・・なんだよ。別に帰ったっていいじゃないか!!」

「何を言ってるんだ? お前も明日来てもらうぞ?」

「はあああああ!!!!?」

い・・・いやだあああ!! 俺は休みたいんだアアア!! 俺に
休暇をくれえええ!!!!

「何で俺まで行かなきゃなんねえんだよ!! ナツとグレイで十分じ
やないのか?」

「・・・・お前、昨日の話聞いてなかったのか?」

「「「「「?」?」?」「「「「「」

「何だよ昨日の話って?? 俺そんなの聞いてないぞ」

「ちよっとライトオオ?? 昨日の話ってどういうこと? 昨日エルザ

と居たって事？」

「ああ！！言ってなかったな！そうそう先日エルザと仕事帰りにばったり出会ってな・・・それで俺はエルザの仕事を手伝って・・・それで・・・」

→長いので省略

「・・・・・・・・」 「・・・・・・・・」 「・・・・・・・・／／／／／」

あ・・・アレエ？？ミラとルーシィが恐ろしい顔をしているな・・・
・・・どうして？？

そしてエルザの顔も何か変・・・・・・・・

「ちょっとライトくん？」

「あっちでお話をしようかあ？？？」

「ちょ・・・ちょ待ってよ！！何で・・・何でお話するの？？」

「ライト！！お前は早く帰って寝ろ。お前は起きるのがただでさえおそいんだから・・・」

「いやあライトくん・・・お話がさきだよ・・・甘いお菓子でも食べながらお話しようか？」

「な・・・なにいい！！！！甘いお菓子だとおおお！！！！」

「だ・・だめだっ!! ライト! お前に寝坊されては困る!! この件が終わったら・・い、一緒にケーキでも食べにい、行ってやるから・
・・・・」

「け・・・ケーキだとおおお!!!!!!」

その後も俺はいろいろな物でミラとエルザに釣られたが俺はお話がいやだったので明日のやつに行くことにした・・・もちろん終わったらケーキをたくさん食べれるという条件で!!

「???」

とある森の中にあるとある闇ギルド

「あの鎧女何処のギルドのもんよ」

「知らね」

「いい女だったな・・・クソオツ!! 声かけときゃよかったぜ」

「オメエじゃ無理だよ」

「何だとっ!!」

「カゲヤマはまだ戻らねえのか？」

「あれの封印を解くのはそう簡単じゃねえはずだ。仕方ねえよ」

「モタモタしてんじゃねえよ・・・今が好機なんだぜえ」

「ジジイどもが定例会をしている今がな!!」

男達はしばらく不適な笑顔を浮かべていた・・・まるで死神の
ように・・・

第16話 最強チーム!? (後書き)

つゝかりれゝたゝゝゝゝじゃなくって

大事なお話とは．．．．．そろそろうちの学校ではテストがあります．．．といってももうちょっと先のことですが、一応俺は熱心に勉強する方なので

いったん更新を停止します

もし、余裕が出来たらテスト勉強中に更新するかも知れませんがあまり期待しないほうがいいかも知れません

とにかくしばらく更新を停止させていただきます．．．
中途半端なところですいませんです。

これからも『FAIRY TAIL』光と闇の魔導士』をよろしく
お願いいたします

第17話 遅刻をするやつは大体バカだ（前書き）

久しぶりです！そうして更新かなりおくれてすいません！！

まあこれから順調に更新していくつもりです・・・

そして、なんかちょっと変わった？？（文章が）

第17話 遅刻をするやつは大体バカだ

チュン チュン チュン

今日ここマグノリアの町は快晴。小鳥が『チュン チュン』とうるさいぐらいに鳴いている。

商店街の方もすでににぎわっている。そんな中、たった今起きた男がいた。

「~~~~ん？もう朝かぁ・・・」

何か今日は大事な用事があったような気がするんだよな

ん~~~~思い出せないな????

考え事をしながらベットから起き上がると、

ドスン！

足を滑らせこけてしまった。

「いってゝ起きて早々コケるとは……目が覚めちゃったよ」

「確か昨日エルザが仕事先で厄介な話がどうたら……でナツとグレイに……あー……っ……！」

あまりの大声に近くにいた小鳥もびっくりして飛んでいってしまっ
た。近くの住民もびっくりして男の家のほうを見る。それほど大き
な声だった。

そうだよ！思い出したよ！！今日は昨日エルザが言ってた厄介な話
を……どうするんだっけ？？

とにかくっ！確か集合場所はマグノリア駅のはずだ。急いで行かね
ば！

確か集合時間は・・・・・・何時だったっけ？？

「ま、まあ、とにかく今すぐにも行こう！！」

早速出発の準備をと整えはじめる

「急げ急げ、急がないとエルザに・・・・」

遅刻して登場した時の事を思い浮かべる・・

『あれほと言っただろ！遅刻はするなとっ！！罰としてご褒美のケーキはなし！！！！』

『ひえゝゝそれだけは勘弁してくださいゝゝ！！！！』

「ま・・まずい！このままではケーキがなくなってしまう！！」

すごく急いで準備し、急いで外へ出た。

「よしっ！こういう時は・・・・・・・・魔法で行くしかない！！」

光の魔法を脚に大量に付加させた。ものすごい光を放っている。周りに居た住民もまぶしいとばかりに皆、目を瞑ってしまう。

クラウチングスタートの体制をとる

「3、2、1、GO！！！」

男は凄まじい風を巻き起こしながら、一瞬にしてその場から消えた。

「やばい、やばい何か街のいろんな物弾き飛ばしちゃってるよ。それより遅刻するほうがまずいな・・・・・・・・」

だってエルザが怖いもの

人間、怖い物は絶対あるんだよ!!

そして今気づいたのだが、

今の俺・・・ジェットと同じじゃないか・・・

数日後、ジェットに住人からのクレームがあつたとか・・・

（数分後）

「お！マグノリア駅が見えてきたな・・・このままのスピードで入

「っちゃんえ!!」

駅の中に入ってホームへ一直線!

「あ! あれはルーシイだ!」

よかったゝ間に合ったっぽいな・・・これでエルザがまだ居なればいいけど

ん? 話し声が聞こえるな・・・もう全員そろってるとか!!?

「あ! エルザさん!!」

お! よかったゝエルザも今来たところか。
なら俺は遅刻じゃないってことか、とにかくケーキ剥奪は免れたな

で、何でルーシイは俺に向かって言ってるんだ??

気にせずルーシイが居るところへと向かう

すると・・・

「今日も仲良く言ってみよー」

「あいさー」

「あはははっ！これ面白いかも」

「「騙したなテ」おっはよおお！！！」メエエエエ！！！！？」

そのままのスピードでナツとグレイに突っ込んでしまった。しかも結構吹っ飛んだ

「ラ、ライトお!？」

「さっそく聞きたいことがあるのだが、何でさっきルーシイは俺に向かって『あ!エルザさん!!』なんて言ったんだ?俺とエルザを見間違えたのか？」

「い、いやそうじゃなくてね、ナツとグレイがうるさいからねえ?」

「なるほど!それいいね!!使えるわ!!!!」

ライトとルーシイがそんな話をしていると、うるさい二人が起きてきた

「ライト!てめえいきなりなんだよ!!」

「ぶつかってくんじゃねえよ!つか全力疾走して来るんじゃねえ!!」

えーっとなツとグレイって何か似てるよね、会話とか

上がナツ、下がグレイの順番で突っ込んできた。

「いやゝゝ遅刻しそうだなあって思って、家からまあ全力とはいえないけど、それなりのスピードで走ってきたんだよ。それでそのス

ピードのまま駅の中に入ったから、ぶつかるのはしょうがないでしょう」

「「いや、せめて駅の前で止まろうよ!」」

「あれ? 所謂いえばハッピーは?」

突っ込みがウザイので話を変えた

「ひどいよライト! オイラは最初っからここにいるよ!」

「あゝごめんごめん、ハッピー全然喋らないから気がつかなかった」

「……オイラ、ライトが来る前は喋ってたんだけど」

「すまない……待たせたか?」

「荷物多っ!!!」

急にエルザ登場したな

そしてまたエルザの荷物多いのかゝゝ今回も2mぐらいあるぞ……

でもこの前見たときよりも少し荷物が多いな。今回は長旅なのか？でも長旅になるとナツとグレイが……喧嘩づくめになるぞ！

「っ！！！ラ、ライトオ！！？ど、どうしてここに？」

「え！？だって昨日エルザが確か、お前も来いっ！っ的なこと言ってたじゃないか」

「そうじゃなくて、私はてっきりライトは寝坊してくるものだと思っただが……」

「俺ってそんなに期待されてないのか……」

今で俺の気分は一気にブルーになった……エルザのせい……

「日ごろの行いが悪いからだ！」

「何それっ！学校の先生が言いそうなことじゃんか！！」

「ん？ところで君は確か昨日ギルドに居たような……」

エ、エルザも俺と同じ手を使ったぞ！！コイツはくせものだ……

「はいっ！新人のルーシイと言います。ミラさんに頼まれて同行することになりました。よろしくお願いします」

「私はエルザだよろしくな」

「おいおいルーシイそんなにかしこまらなくてもいいじゃないかゝいつものお前でいいだろうに。それに、これから一緒に仕事するんだからさ？」

「ま、まあ確かにそうねえ・・・（ライトがまともな事言ったっ！）」

「・・・そ、そうだな、私もそのほうがいいな（ライトが久しぶりにまともな事言ったな）」

この二人はライトがまともなことを言うとは思ってもいなかったの
で少々面食らってるようだ

さっきからナツとグレイ、エルザが見えないところで睨み合ってる
な・・・ほんと懲りないな・・・

「そういえばギルドの連中が騒いでいた娘とはルーシイのことか」

よし、ちゃんと名前って言ってるな。

ここで名前をいえないヤツは、はっきり言ってしまうがダメなヤツだな。

さすがエルザだ！

「なんでも傭兵、ゴリラを倒したとかなんとか・・・頼もしいな」

「それ、倒したのナツだし事実と少し違ってるし・・・（小さな声で）」

「今回は少々危険な橋をわたるかもしれないが、その活躍ぶりなら平気そうだな」

「き、危険！！！？」

「ほお、う危険なのか・・・で、どんな厄介ごとだ？」

「それは列車に乗ってからはなそう。ってライトは知ってるはずなんだがな？」

「だって俺そんな厄介ごと聞いたことねえぞ？まさか・・・俺が糖分補給しているときか！？」

「ああそうだ、お前が夢中で食ってるときだったな」

「糖分補給って・・・」

ルーシイって本当に突っ込み担当だよな。父ちゃんと母ちゃんが漫才師だったのかな？

てかさっきからハッピーが居なくなっちゃった……会話から

すると急にナツが

「エルザ！俺は何の用事か知らねえが今回はついていってやる。ただし、条件付でな！」

「条件？」

「ば、バカ！！オ、オレは……エルザの為なら無償で働くぜ！！」

いいねえ〜グレイ、そのボランティアみたいな思考はとて面白い！！

ぜひいろんな国に行ってぼらんでい〜あに行ってもらいたいっ！！！！

「なんだ言ってみろ」

「帰ってきたら俺と勝負しろ！あの時とは違うんだ！」

あの時ってどの時？いつもエルザにやられてたと思うけどな？？

「お・・・おい！早まるな！！死にてえのかっ！！！」

「・・・確かにお前は成長した。私はいささか自身はないが・・・いいだろう受けてたっ」

「自身がねえって何だよっ！！本気でこいよ！！」

「フフ・・・分かっている、だがお前は強い・・・そういたかったただだ」

「グレイも私と勝負したいのか？」

ぶる　　ぶる

首を横に振っているのでNOか・・・グレイとエルザの戦いもみてみたかったな

「!?!? そうだっ! ライトも俺と勝負だ!?!」

「っげ!?!? まじかよ………きゃ、却下!」

「な、なんでだ!?!」

「だって……俺めんどいもん♪」

「ライト!?! お前も戦ってみてはどうだ? 何なら私とでもいいぞ?」

「い、いやもつとやだよ!」

「な………何故だ……?」

や、やべえエルザが悲しい顔になっちゃったよ………よくやっちゃうんだよな……俺

「い……いやその……!?! あれだ! トーナメント形式にしよう!?!」

「おお!?! それいいな! よし、じゃあ俺とエルザで戦って勝ったほうがライトと勝負だ!?!」

あれ? 俺一番上なの?

「ああそれがいいな!! そうですね♪」

ま、いっか!!!!

どうせ俺が言い出したことだし! うん、うん (泣)

「おっしやああああ!!!! 燃えてきたアアア!!!!!! やって
やろうじゃねえかア!!!!!!」

ボゴオオオオオ!!!!

荒々しくナツの顔は炎で燃え上がっていた・・・暑苦しいです

第17話 遅刻をするやつは大体バカだ（後書き）

何か最初るときよりこの小説だいぶ！だいぶ変わりましたね！

文章書いてたら『あれ？ハッピー出てねえ！？』と思ったので、あのどうでもいい会話を入れました。ただそれだけを言いたかったのです！！

では、では……

第18話 人の話は最後まで聞くべきだ（前書き）

本当は2日前には更新していたはずだったんですけど
半分ぐらいまで18話書いたのに、間違って消してしまったのです
！！

それでちょっと遅れてしまいました。今後は気おつけますっ！！！！

第18話 人の話は最後まで聞くべきだ

ポーーーーッ！

ガタン ゴトン ガタン ゴトン

「はぁ・・・はぁ・・・うつ・・・はぁ」

皆さんご存知の通りナツは乗り物が全くダメです。
だから今現在ナツは→このような状態になっているのです。

そして、列車内の座席は←こうなっているっ！！

窓

エルザ	ナツ
ハッピー	ライト
ルーシィ	グレイ

廊下

「なっさけねえなあ・・・ナツはよオ

うっとおしいから別の席に行けよ！つーか列車乗るな！走れ！！」

「う・・・」

「グレイ、ナツは列車に追いつけるほど足早くないよ、たぶん」

「い、いやそういうつもりで言った訳じゃねえぞ・・・」

「毎度のことだけど、つらそうね」

「まったくしょうがないな・・・私の隣に來い」

「あゝい・・・」

「どけて事かしら・・・（小さな声で）」

ん？エルザ酔い止めの薬も持っているのか？と、誰もが思っただろう・・・が、しかし次の瞬間！

ボスッ！！

「ぐぼお！！・・・」

「「「!?!?!」」」

なんとエルザがナツの腹を殴って気絶させてしまったのだ!! やっぱり、さすがエルザだっ!

「これで少しは楽になるだろう・・・」どさっ

「「「・・・・・・・・」」」

コレが列車内の座席、改訂版だっ! ←

窓

エルザ ルーシィ

ハッピー

ナツ グレイ

(気絶している) ライト

廊下

「エルザそれ違う意味で楽になってないか? てゆうかそれ気絶させちゃってるし・・・」

「これがベストの方法ではないのか？」

「いや、俺はてっきりエルザが酔い止めの薬でも持ってるのかと思っただけだなあ、さつき・・・」

皆、エルザが恐くて突っ込めないのかな？でもやっぱりツッコミ役のルーシィはどんなことにでも突っ込まなきゃダメだと思うんだよね。俺もたまにボケに行ったりするし、ツッコミがちゃんとしてないと、このチームは成り立たないと俺は思う！

ガタン ゴトン

「そういや、あたし妖精の尻尾でナツとライト（あとハッピー）以外の魔法見たことないかも。エルザはどんな魔法使うの？」

「エルザの魔法は綺麗だよ、血がいつぱい出るんだ、相手の」

「ハッピーそれは綺麗とはとてもじゃないがいえないだろう」「『とてもじゃない』ってなによ・・・」でもエルザの鎧はカッコイイのか綺麗なのとかいっぱいあるからねえ」

「そ、そうか・・・／／／／」

「え！？エルザって鎧を使うの？」

「あゝあライトが言っちゃうからルーシーにばれちゃったじゃないか・・・

これからエルザ様の『SHOW TIME』が始まるところだったのに」

「ハッピー『SHOW TIME』ってなんだよ。それに様って・・・」

「あれ？エルザがこれから戦いに行くって話じゃなかったっけ？」

「「いやいや、違うから」」

「話を戻すが、私の魔法よりグレイの魔法の方が私は綺麗だと思うぞ」

「そうか？」

すると、グレイは左手を開いた手の平の上に右手をグーにしてのせて、魔力を込めた。

「フンッ!!」

シュウウウウウウ

キラリーン

グレイが右手を開くと、左手の上にはフェアリーテイルのマークが氷で形どられていた。

ま、まあグレイにしては綺麗なんじゃないかな？

「わぁっ!!」

「氷の魔法さ」

「氷ってアンタ似合わないわね♪」

「それ軽く傷つくぞ……」

すると、ルーシィはグレイを見て……「氷！」

今度はナツを見て……「火!!」

「あ!!!!!!」

だからアンタたち仲が悪いのね!!単純すぎてかわいいー」

「そうだったのか？」

「どうでもいいだろお！？そんな事ア・・・」

「おお！確かに魔法も関係あるのかもなあ！！よし、じゃあナツとグレイがケンカしないためにグレイ、お前魔法変えろ」

「無理だろっ！！それに魔法たぶんカンケーねえし！！！」

あれこれ話してると、列車が止まった。何処かの駅についたのかな？

『運転手の交代を行いますので、しばらくお待ちください』

「ルーシィ、俺お腹が減ったからサンドイッチと何か甘い物買ってきてよ」

「はあ？何で私が？そんなの自分で買いに行つてよ」

「じゃあ私もケーキを頼もうかな」

「じゃ俺はサンドイッチで」

「オイラは魚が欲しいな」

「み・・・皆あたしをパシリにつかうの・・・」

「じゃあ俺が金出すからさ、あまったお金はルーシイに全部あげるよ」

俺はルーシイに5000J渡した

「ほ、本当に！？じ、じゃ行ってこようかな～～」

「「「「いってらっしゃい」」」」

はっはっは、ルーシイは釣られやすいな～～

ルーシイはツツコミも出来るし、パシリも出来るし、なんてすばらしい人間なんだ～～～

「あれ？ルーシイなんかやってるよお～～店の人に」

「ん？どれどれ？」

ハッピーが何か言ってるので窓からルーシィの居るところを見てみた・・

「ねえ～～まけてよお～～♪」

「そ、そんなこと言われても・・・こっちは商売でやってるんですから・・」

「今回だけっ！！お願いっ！！！！」

ルーシィは手を合わせすりすりところすり合わせながらお願いしている

「はぁ～もうしょうがないな～～ちよっただけですよ・・」

「やったああ♪」

「「「ルーシィ・・・・・」」」

「ルーシィ何時の間にあんな手口を・・・」

さすがのエルザも驚きのあまり声が出てしまったらしいな・・・
まあ確かにこれには驚きだ

や、やべっ！ルーシイ戻ってきた！！

「おまたせ〜♪買ってきたよ♪」

「お、おう・・・」

「ん？どうかしたの皆？」

「い、いやなんでもないぞルーシイ。それより私のケーキはちゃんと買ってきてくれたか？」

「ああ、うんちゃんと買ってきたよ！ライトの甘い物はプリンにしたわ」

「おお！サンキュー♪」

『大変お待たせいたしました。運転手の交代が終了いたしましたので、まもなく発車します』

ポーーーーッ！！

ガタン ゴトン

ガタン ゴトン

皆、ルーシイが買ってきてくれた食べ物を食べ始めた。もちろんダ
ウン中のナツの分はない

まあダウンさせたのエルザだけど・・・ナツ！うらむならエルザを
うらめっ！！

「そろそろ本題に入ろうぜエルザ モグモグ 一体何事なんだ ゴ
クン お前ほどのヤツが人の力を借りたいなんて、よほどのことだ
ぜ」

「そんなことすっかり忘れていたな パクツ あまりに話が面白か
ったのでな モグモグ それじゃあ話そうか・・・ゴクン」

やっと本題だよなつく・・・もうほとんど旅行気分だったよな絶対

「先の仕事の帰りだ、オニバスで魔導士の集まる酒場へ寄った時、
少々気になる連中がいてな・・・」

正直言って俺は何も覚えてない、ってか何も聞いてないです・・・
これからは目の前の甘い物に夢中になり過ぎないように気おつけよ
う・・・

『コラァ!! 酒遅エぞ!!!』

『!!』 『モグモグ ガツガツ』

『まったくよオなにモタモタしてんだよオ!!』

『す・すいません』

『ビードそうカツカすんな』

『うん』

『コレがイラつかずにいられるかってんだ!!!』

すると男は魔法を使って店員が持ってきたお酒の中身だけを自分が持っているジョッキに移し変えた

ジョボボボボボ

『ひっ!』

『せえっかくラバイの隠し場所を見つけたたつてのによお!あの封印だ!!!何なんだよアレはよお!!!まったく解けやしねえ!!』

『バカッ!!声でけえよ』

『うん、うるせえ』

『くそおっ!!!』ぐびっぐびっ

男はイラつきながらお酒を飲んでいる。まさに自棄酒^{やけざけ}である

『あの魔法の封印は人数がいれば解けるってものじゃないよ』

『あ?』

『後は僕がやるから皆はギルドに戻ってるといいよ。エリゴールさんに伝えておいて、必ず三日以内にララバイを持って帰るって』

『マジか!?解き方思いついたのか?』

『おお!!さすがカゲちゃん!!!』

ガタン　ゴトン　　ガタン　　ゴトン

「ララバイ？」

「子守唄って意味だよね．．．ふあゝあ．．．．．」

「ララバイ．．子守唄．．眠りの魔法か何かかしら？」

「つーか俺眠いから寝るわ．．．」わからない．．．しかし封印されているという話を聞くと「あれ？もしかして聞いてない？」かなり強力な魔法だと思われる」

「まあいいや、着いたら教えてね」話が見えてこねえなア．．．得体の知れない魔法の封印を解こうとしている奴等がいる．．だがそれだけだ、仕事かもしれないなんて事アねえ」

「そうだ．．．私も初めはそう気にはかけていなかった．．．エリアイゼンヴァルトゴールという名を思い出すまではな．．．魔導士ギルド鉄の森のエース　死神エリゴール！」

もうここまで聞いていば十分だろうし本当に寝よう・・・

Z Z Z Z . . .

Z Z Z Z Z . . .

その後の皆の話は全く聞いていない・・・それはもちろん列車の中で寝ていたからだ。

あの話の後すぐに列車は止まり、エルザたちは降りてその数分後にナツと俺がいないのに気づいたらしい・・・

第18話 人の話は最後まで聞くべきだ（後書き）

実は近日、ミニテスト的なものがあるので勉強するつもりですが、

出来れば2日以内に次話を更新するつもりです

無理だったら3日後かな？

第19話 忘れ者には注意しましょう（前書き）

だんだん更新スピードが落ちてますね〜すいませんっ!!

そしてこの題名にはいくつかの意味があるのだ！

第19話 忘れ者には注意しましょう

ガタン ゴトン

ガタン ゴトン

キイイイイイイイツ！！

ガタアンツ！！！！

ゴチン！「い、いってえ〜」

何だよ、何だよ全くなんで急停車すんだよ！おかげで頭、向かいの座席にぶつけたじゃないか！！！！
下手したら大怪我だよ！！さっき交代したばかりの運転手さんし

っ
かりしてくれよ・・・

俺はそんな愚痴を心の中でこぼしながら目を開けてみると、

「・・・お返しだッ!!!」

ゴッ

「ぐはっ」

ガコッ

ドカッ

ドシヤッ

ズザアアアア

「ハエパンチ！」

ぶぶんぶん

男がナツによってぶっ飛ばされている瞬間だった！

「ば、バカヤロオ!!! ナツ、お前一般人を殴っちゃダメだろ!!!
! ってかエルザたちは!??」

「お! ライト起きたかつ! エルザ・・・あいつ等俺たちを置いていきやがったんだ!」

「ちゃんと起こしてねって言ったのに・・・つかオメエ、エルザに怒られるんじゃないね、それ」

「なっ!!! だ・・・大丈夫だ!!!」

「何が!??」

「だからコイツはフェアリーテイルの事をバカにしやがったんだ! それに俺のことも殴ったし!」

「そうか・・・フェアリーテイルをバカに・・・ね」

「おい! 俺が殴られたのは無視かつ!??」

するとさっきナツに殴られた男が立ち上がった

「て、てめえ・・・！」

男は髪が長いのか後ろで髪を結んでいた

「おい、お前フェアリーテイルをバカにしたんだってな～～」

「それがどうした？妖精^{ハエ}を妖精^{ハエ}って呼んで何がわりイ？」

「てめえ～～！」

『先ほどの急停車は誤報によるものと確認できました。まもなく発車します。大変ご迷惑をおかけしました』

「マ・・・マズイ

逃げるぞライト！！」

「どうしてっ！？」「逃がすかあっ！！！」

「列車が発車しちまったら俺が気持ち悪くなるからだよ！！それぐらい常識だろ」

「いや別に常識じゃないと思う・・・」

「おい！てめえ等鉄^{アイゼンヴァルト}の森に手エ出したんだ！」「てめえ等って俺も入ってんのかよ・・・」ただで済むと思うなよ！妖精^{ハエ}が！！」

「こっちもてめエの顔覚えたぞ！さんざんフェアリーテイルをバカにしやがって・・・」

ポオオオオオオオオ！

ガッシャン

ゴトン・・ ガタン ゴトン

「今度は外で勝負してや・・・うぷっ」

「とう！」ガシャン

するとナツは窓を割って外に飛び出してしまった！しかも列車は結構加速しているのでかなり危ない。

さらに！ナツは俺をつかんでいきやがった！だから俺も外へ・・・
・飛んでゆく

外へ飛んでいく前に、男の近くにドクロ髑髏の笛？のようなものが見えた。
・趣味わるっ！！

と一瞬のうちに思った

「「わあああああ!!」 ナツのバカアア!!」

すると近くから変な音が聞こえてきた・・・これは車??

ズギヤギヤギヤギヤ

「ナツ!？」

それはエルザだった!
もちろん車・・・いや魔道四輪車の上に乗ったグレイやルーシィ、
ハッピーもいる

「何で列車からナツとライトが飛んでくんだよオオオ!!!!」

「うわあああっ!」

「どーなつてんのよ!!?」

「うわああ落ちるーーーー!!・・・訳がない!俺には魔法があるのだっ!!」

「なにー!ずりいぞライトオオオ~~~~」

俺は早速、光の魔法でハッピーの真似の羽を自分につけた。ふっふっふこれで俺は飛んでゆけるっ!

「「「「あっ!」「」「」」

ゴチン!

ギヤアアアアアアアアア!!!!!!

あゝあナツとグレイの頭ぶつかっちゃった。すげえ痛そう・・・

キイイイイイ

「ナツ無事だったか!!?」

「きっと今ので無事じゃなくなったよ」

「あららら・・・」

「痛ーーーーっ!!! 痛エ! オメエ何しやがる」

「え!? 誰お前、つーかくせエ」

「オイイイイイ!!! 何で記憶喪失!!!?」

「え!!!? ナツ記憶喪失しちゃったの???」

おい皆早くこっちに来てくれ! ナツが記憶喪失になっちゃったって
!」

「何!? それは本当かつ!!」

「ええええ!? 記憶喪失???」

!!!! コレはビックチャンス!

小説に使えるかも!」

おい！ルーシイもボケかよ！まさかツツコミ俺だけかつ！！？

「ナツウウウ！おいら列車に魚置いてきちゃったんだけどさ、持って来てくれた？」

「は？そんなもん見てねえけど？」

どうでもいいこと言うなよハッピー・・・魚なんか何処にでもあるだろうが

「あれ？ナツ記憶喪失してるんじゃないかったっけ？」

「・・・！！ゴホンッ！何それ？魚ってなに？」

うわあああ・・・ナツ完全に記憶喪失じゃないじゃん。もうバレバレじゃん

「ってか、おい！エルザ！グレイ！ルーシイ！ハッピー！ひでえよ俺のこと置いていきやがって」

「す、すまなかった」

「ごめんね♪」

「わかったな・・・」

「ごめんね〜ライト、ところでライトはオイラの魚持って来てくれた？」

ハッピー魚ぐらい別にいいだろ・・・もう忘れろっ！

「とにかく・・・二人とも無事でなによりだ」

ここでエルザの抱擁&鎧に頭をぶつける

が、いつものパターンならあるのだが、俺は距離をとって回避

ナツは・・・記憶喪失ウッによりなし、それで二人とも回避に成功！
！やったね♪

「そうそう何か列車で変なヤツに絡まれたんだよね？ナツ」

「！！！！そうそう！たしかア・・・イゼン・・・バル・・・ト？だっけ？」

「バカモノオオオオ！！」バチイン

「ん！！？」

エルザがナツに強烈なビンタを食らわした！そしてナツが5〜7メートル吹っ飛んだ

「ごわああ！！」

「エ、エルザ！！いくらナツの記憶喪失がウソだからって、そんなにすることはないだろ！」

「な、なに！？記憶喪失がウソだと！！！その分もたたかなければ・・・」

あ、じゃあアレかエルザはアイゼンヴァルトの件で怒っているのか・・・ってか記憶喪失がウソってのに気づいてないのはエルザだけだったと思う

「ん！！アイゼンヴァルトってたしか今回の厄介ごとの・・・」

「そうだ！鉄の森は私達が追っている奴等だ！！なのにナツときたら・・・そういえば・・・ライトもあの場に居たんだよね？」

「え？　そうだけど？」

「ライト！　お前も私の話をちゃんと聞いてなかったのか！！」

つちよ　エルザが恐くなった・・・

「い・・・いや俺はちゃんとエルザの話は聞いてたし、ナツはエルザが気絶させたから話は聞けてないし、しょうがなかったんだよ！」

「・・・そうか・・・ナツは悪くないのだな、じゃあライトが悪いのだな！　覚悟しろ！！」

そしてエルザは剣を構える

あ、そっか俺はエルザの話を聞いてながらもアイゼンヴァルトのやつを捕らえるのを忘れていたのか・・・俺が悪者になっちゃったじゃんか（悔）

「そ・・・そいえば・・・あいつ変な物持ってたな・・・」

「こ、こらっ！　話をそらすな！！」

「そうそう、変な髑髏っぽい笛もってたな・・・三つ目がある髑髏だ」

ナイスだナツ！たすかったぜっ！！

「何だそりゃあ？趣味悪い奴だな」

お！さっきまで若干空気になってた 그레이 が帰ってきたよ

「三つ目の・・・髑髏・・・」

「どうしたのルーシィ？」

ハッピーの喋りって誰でもいいそうなことだから、誰かと間違えそうだな・・・

「ううん・・・まさか・・・ね・・・あんなの作り話よ・・・でも！もし、その笛が呪歌だとしたら・・・子守歌ララバイ・・・眠り・・・死・・・・！！！！

その笛がララバイだ！！！！ララバイ呪歌・・・『死』の魔法！！！！」

ルーシィの衝撃の言葉にその場の皆は驚愕した

第19話 忘れ者には注意しましょう（後書き）

え〜今回も無事に終了しました！おつかれさま〜

・・・今後も更新スピードが落ちる可能性がとても高いです。
まあ一様、僕受験生なので〜〜〜（笑）

そろそろ受験勉強をはじめないと親が・・・あれなんで・・・
・
・

それじゃっ

第20話 危険な運転は周りの人に迷惑かけるからやめなさいっ!! (前書き)

よく考えたらこの小説

進むのが遅いんですね・・・

更新早くするように努力します

第20話 危険な運転は周りの人に迷惑かけるからやめなさいっ!!

「その笛がララバイだ!! 呪歌^{ララバイ}・・・『死』の魔法!!!」

「何!!?」 「マジかつ!!?」

「呪歌?」

「???」 「オイラの・・・さくなくくがくくく」

あゝハッピーよ、お前はこのシリアスな空気をぶち壊しやがったな・
・・・オイ

魚なんか俺が買ってやるからっ!! 高いの買ってやるからっ!! ↑
(やっぱうそ)
もう魚なんか忘れてくれっ!!!!

「・・・あたしも本でしか見たことがないんだけど、禁止されて

いる魔法のひとつに呪殺ってあるでしょ？」

「うん、確か対象者を呪い、『死』を与える黒魔法だったかな？」

「そう・・でも呪歌ララバイはもっと恐ろしいの。

禁断の魔法・・呪歌ララバイ、ララバイは元々『呪殺』の為の道具だったらしいの」

「・・・しかし魔法界の歴史上、もっとも凶悪だったと言われて
いる魔導士・・黒魔導士ゼレフが更なる魔笛へと進化させてしま
った」

「ララバイの笛の音を聴いた者全てを呪殺する・・」

「『『集団呪殺魔法』呪歌ララバイ!!!』」

「ってなんでライトがそんなこと知ってるわけ？」

「決まってるだろそんなの……俺も本とか読んでるからだ!!」

……あれ? 何皆して変な顔してるんだ?

そんなに俺が本を読んでるのが似つかないのか……?

「ライトが? うそだあ?」

「……ありえないな、ライトなんかの本なんて読めるわけがない」

う……うわああああ……心に刺さる言葉……

「ひ、ひどいよ……皆……」

「!!!!!! いかんっ! こんなことしている場合じゃない! 急いでさ
っきの列車追うぞ!!」

「おう!」 「ああ!」 「あいさー!」 「うん!」 「……………」
おー……」

全員急いで（ライトは急いでない、ってか急げない）魔道四輪車に
乗って、さっきの列車を追った

もちろん運転手はエルザ!!……………ってそれまづくない?

絶対、あの子ならスピード出しまくるでしょ!!!

『緊急事態だからしょうがない!!』とか何とか言って、絶対ものすごいスピード出すでしょ!!

まづいっ!!運転手かえないと!!!!

危機を感じたのかライトは急いで運転手をかえようとする……が

「発車するぞ!スピード出さからしっかりつかまれっ!!」

「つちよま……運転S」

ブオオオオオオオン!!

は・・・発車しちゃった!!

間に合わなかった・・・

ドドドドド!

そして予想以上にスピード出してるよ!!!!

やばい・・・酔うかも・・・しれ・・・ない

今、この魔道四輪車が走っているところは運悪く悪路です。
ものすごくデコボコしてます。だからこんなところでスピードを出
すと・・・・・・・・

「うっぷ・・・降ろしてくれ・・・・・・・・死・・・ぬ」

重症なヤツは→このようなことになってしまおうのです!!

だからエルザ・・・

もうちょつとスピード落としてくれ~~~~~
(泣)

「集団呪殺魔法だど!? そんなものがエリゴールの手に渡ったら・・・
・・・

おのれ！！ 奴等の目的は何だ！」

エルザまったく気にしてないし！・・・むしろなんか独り言、言っているし！！

〽数分後〽

クヌギ駅に到着しました・・・

もう俺はグタグタであります・・・

一度もスピードを落とさなかったからな……エルザはすごいよ、
ある意味で

ざわざわ ざわざわ

何か駅の方が騒がしいので覗いてみると……

「いきなり大鎌を持った男達が乗り込んできたんです！」

「ワシは知っとるぞ！あいつ等はこの辺にいる闇ギルドの者だ！！」
「！」

ざわざわ ざわざわ

「あいつ等列車を乗っ取ったの！？」

「みたいだね」

今は魔道四輪車止まってるのにナツが結構苦しそう・

けど、俺も結構苦しかったりする

「馬車や船とかだったら分かるけど・・・列車って」

「あい・・・レールの上しか走れないし、奪ってもそれほどのメリットはないよね」

「・・・でもスピードはあるぞ」

「じゃあ何かをしでかす為に奴等は急がざるをえないということか？」

んゝ奴等はララバイで何をするつもりなんだろ・・・

だめだ・・・気持ち悪くて考えられない

「でも、もう軍隊も動いてるしあいつ等が捕まるのも時間の問題なんじゃない？」

「いや・・奴等も魔導士だ・・・・だからもしかすると軍隊がやられてるってことも・・・」

「そ、そんな・・・」

「まあありえない話ではないな・・・」

アイゼンヴァルト
そのころ列車に乗っている鉄の森は・・・

ガタン　ゴトン

ガタン　ゴトン

「妖精^{ハエ}だア？」

「ええ・・さっきまでこの列車に乗ってましてね・・・まったく
ふざけた奴っスよ」

「ギリッ」

スパァン

「あゝっ」

大鎌を持った男は、カゲと呼ばれる男の両耳を一瞬で斬ってしまった

「いぎいいいいっ！！！」

痛さあまりにカゲは両耳を手で必死に押さえる

「まさか感づかれたんじゃないやねえだろうなア」

「妖精^{ハエ}なんかに感づかれたところでこの計画は止められやしないでしょうがっ！！！」

「そんなの当たり前だ・・・しかし邪魔はされたくねえ・・・わかるな？それに・・・妖精^{ハエ}のギルドにはあの闇^{ダークネス・フエアリ}の妖精がいるしなア・・・」

「まさか・・・こんなところにいるわけが・・・」

「しかし最近、闇ギルドを潰しにまわっているという噂が・・・ある」

「・・・つく・・・」

「妖精^{ハエ}かア・・・飛び回っちゃいけねえ森もあるんだぜエ」

一方エルザたちは・・・所変わって街中を走っていた

ギャギャギャギャ！

スピードを出しすぎて街中のいろんなもんを吹っ飛ばしてるよ・・・
エルザさんよお・・・

もしかして俺らアイゼンヴァルトより悪いことしてる？・・・
そんなわけないかつ！
そんなことがあるわけないっ！！！！そう信じよう！（泣）

あれ？でもよく考えたらこれ怒られんの俺じゃね？

まーコレでもいちよう聖十大魔道だからね！
けど最近なったばかりだし、なにもしてない・・・まあ評議会
嫌いだしね

あんな評議会からのかったるい仕事なんてしてられるかってんだ！

「エルザ！飛ばしすぎだっ！！SEプラグが膨張してんじゃねえか！」

「あの笛が吹かれれば大勢の人が死ぬ・・・音色を聴いただけで人の命が消えてしまうんだっ！！」

「わかってっけど奴等の目的もはっきりしねえ・・・一戦交える可能性もあるんだ。そんなにスピード出してたらいざって時にお前の魔力が枯渇しちまうぞ！」

「いざとなれば棒切れでも持って戦うさ・・・それにライトやお前達がいるしな」

「む・・・」

「何かルーシイに言うことあった気がする、忘れたけど」

「何よ？」

「だから忘れちゃったんだって」

「どうせルーシイが可笑しいとかその辺だろ？」

「あ！それk「やめてそういうの・・・」

「なんだったっけな~~~~うん」

「うぷっ・・・キモチワリイ・・・」

「あ！そr「だからっ!!!」

「あ！おいナツ落ちるぞ!!!」

「うゝおおおお落としてくれエエエ・・・」

「お前このスピードの中落ちたらナツでも痛いぞ・・・多分」

「俺は・・・落ちたいんだアア・・・あ！イグニールだ！・・・おい・・・」

「やばい！やばい！ナツが見ちゃいけない物を見ちゃってるぞ!!!
ナツだめだ！そっちに逝くな!!!エルザ！急いでくれっ!!」

「わかってる!!」

「あ！いやだめだ！急いだらよけいにナツがあつちに逝ってしまう
!!!」

「どっちだ!!」

「・・・オシバナ駅から・・・煙？」

そう、オシバナ駅からは高々と煙が上がっていた・・・

第20話 危険な運転は周りの人に迷惑かけるからやめなさいっ!! (後書き)

あと何話でアラバイのお話は終わるのかな・・・？

結構かかりそうですね・・・

では、また

第21話 鉄の森《アイゼンヴァルト》の目的（前書き）

ちよつと更新するのに時間がかかりましたね。

自分はあるべく早く更新したいと思っているんですが・・・

第21話 鉄の森《アイゼンヴァルト》の目的

あれから数分たってオシバナ駅に着いた。

するとオシバナ駅にはたくさんの人がいた……いわゆる野次馬だ。

俺たちは駅の中に入りたいのにこの野次馬達が邪魔で、邪魔でしようがない。

しょうがないので俺たちは野次馬どもをかきわけて進むことにした

『みなさん！！お下がってくださいここは危険です。ただいま列車の脱線事故により駅には入れません』

野次馬が『脱線』だの、『テロ』だの騒いでいる

『内部の安全が確保されるまで駅は封鎖します』

もちろんエルザが先頭で野次馬どもをかきわけてゆく。ハッピーは翼で野次馬達の上をスイスイと進んでゆく ↑ハッピーだけせいぞっ！！

「行くぞ!!」

「でも、封鎖って」

「んなもんいちいち聞いてられっか」

「うぷ」

「人酔いしてんじゃねエ!」

「ぬをくく潰されるくくくく」

「つちよ、ライト!? 大丈夫?」

皆よくこんな人の中を進んで行けるな・・・俺はもう潰されちまい
そうだア・・・

・・・!! そうだっ! 俺もハッピーみたいに飛んで行けばいい
のか!! うんそうしよう!!

「よし、俺も飛んで行くぜっ!!」

俺は光の魔法で背中に翼をくっ付けて、飛んだ

「え!?! ライトオ? セこくない?？」

「ん? じゃあルーシィも飛ぶ?」

「え? ということ? って!! . . .」

ルーシィにも光の翼を授けて、飛ばさせた

「っちょ、ちょっといきなり!!」

ルーシィが暴れるので空中でぐるり、ぐるりと何回転もする
すると下の野次馬が目をハートマークにしている

あちゃー失敗だなこりゃア . . . 女の子にコレは不味かったな . . .
. . .

「ごめん、ごめんルーシィ悪かった」

ルーシィの光の翼をはずしてルーシィが下に落ちる前にキャッチ
すると必然的にお姫様抱っこ状態になった

「いきなりは不味かったな・・・今度ちゃんと飛び方教えてやるからさ・・・ゆるしてくれる？」

「う、うん／＼／＼／」

あ！！皆もう先に行ってるし！ったく今日は2回も皆においてくれたよ・・・

「ルーシィ行くよ！」

「うん」

光の翼は加速が早いので短い距離だとあっという間に着いてしまう。だから、エルザたちの所まで一瞬で着いた。

あまりの速さにルーシィがちょっとびっくりしてた・・・

「到着ーつと」

「ん？ライト遅かったじゃ・・・」

アレエエエ؟؟エルザ・・・さんが急にとても怖い顔になったな・・・

あれか、やっぱり遅くなったのが不味かったのかな？

あ、ルーシー降ろさないと

「ほい、ルーシー」

「あ、ありがとう／＼／＼／＼／」

「ライト……お前は一体に何をしていたんだ？」ゴオオオオオオオオ
オオ

う、うわああああ……メツチャ怒ってるよ

もう『ゴオオオオオオオ』なんて効果音まで出てるし・

つか殺気っぽいのが感じられるな？

「い、いやゝあの……その……遅くなってゴメンナサイっ！……！」

ちゃんと謝ったし、これでエルザの気も収まるだろ……？……？

な、なんでえええ???

エルザがまるで『そっちじゃない!』って言ってるような顔をして
いるんだけど??

殺気も全然収まってないし!!!

「ご、ゴメンナサイっ!!!!!!」

畜生!こんな所で土下座なんかしたくないのに……!!でもエル
ザ……様を怒らせると天変地異が起こりかねないのだ!!これも世
界平和のためだっ!

「……まあいいだろう、許してやろう……それじゃあ聞き込
みだ!」

え!?!なんで?普通に中に入ればいいじゃないか?

すると早速エルザは『真っ赤なおくはくなの♪トナカイ……』
……じゃなくって赤い鼻の人に聞き込みしに行った。

「駅^{なか}内の様子は?」

「な、何だね君は!!ここは立ち入り・って!」ゴッ「ぐはっ」

「「!!!!」」

なんと!エルザが急に駅委員の人にヘッドバッドを食らわしたのだ!!

つか赤鼻の人、一発KOだし・・・

「駅内^{なか}の様子は？」

「は?・・・ってここは立ち・・・」ゴッ「ぐはっ」

おいおい、またかよ・・・

「駅内^{なか}の様子は？」

「ひい!ご、ゴメンナサイ!」ゴッ「ぐはっ」

あゝあ、もう3人もヘッドバッド食らわしちゃったよ・・・
しかも最後の人なんて謝ってたからね・・・

なに?なんなの?エルザはストレス発散の為に駅委員の人にヘッドバッドしてんの?
これフェアリーテイルってばれたら完全に俺が怒られるよね?この

場にいるんだし・・・

「中へ行くぞ！」

「おう！」

「あいさー」

「ルーシィ、コレを頼^{ナツ}んだよ！」

「え！？何で私が？」

「いいから早く行くぞ！」

「わかったわよ・・・もう」

その後、中にいた駅委員にもエルザが聞き込みをした。
でも今度はちゃんとヘッドバッドをしないで普通に聞き込みをした。

ってことはやっぱりさっきのはストレス発散かな？

『軍の小隊が突入したんだが、まだ戻ってきてないよ』

『アイゼンヴァルト・・・テロリストたちは？』

『まだ出てきてないよ！！おそらく中で戦闘が！』

ホームに向かう途中の階段で軍の小隊が全員やられていた・・・

「ひいひい！！」

「ぜ、全滅！」

「相手はひとつのギルド、すなわち全員魔導士」

「軍の小隊じゃ相手にならなかったようだね・・・」

「急げ！ホームはこっちだ！！」

グレイが久しぶりに喋ったよ……あ、でも最初の方、一回喋ったか

俺たちは急いでホームへ向かった。
するとホームにはなんと……

「「「「!?!?!」」」」

……闇ギルド、アイゼンヴァルト鉄の森がいた

「やはり来たな……フェアリーテイル妖精の尻尾」

「な……なにこの数……」

「待ってたぜえ」

「貴様がエリゴールだな」

そう、こいつがエリゴール……
アイゼンヴァルトのエース 死神エリゴールと呼ばれている男だ

白髪で大鎌を持っている。本当に死神みたいだ

「あれ・・・あの鎧のねえちゃん・・・」

「なるほど・・・計画されたのお前のせいじゃん」

「ナツ!!! 起きてよ!!! 仕事よ!!!!」

「無理だよ!! 列車↓魔道四輪車↓ルーシィの3コンボだ!!」

「あたしは乗り物なの!!?」

「あれ? ってか前ナツが『ハッピーは仲間だから』とかでハッピーにもってもらっても酔わなかったよね?」

「・・・じゃあ、あたしは仲間って見てもらえてないって事・・・?」

「い、いやそれは知らんが」

あ、ルーシィが泣き目になっちゃった・・・

「っち 妖精^{ハエ}がア・・・お前等のせいで」

「落ち着けよカゲちゃん」

「ん？この・・・声は・・・」

「貴様等の目的はなんだ！？返答しただけではただでは済まさんぞ」

「こっちは遊びてんだよ・・・仕事もねえしヒマなもんでよ」

『はっはっはっはっは！』

アイゼンヴァルトの奴等が笑いやがった・・・一体何が目的なんだ

するとエリゴールは魔法で空中に飛んだ

「まだわかんねえのか？駅には何がある？」

「飛んだ！」

「風の魔法だ！！」

それぐらい見れば誰でもわかるだろ、ルーシイとハッピー空気読ん

でくれよ・・・

「駅？」

アイゼンヴァルトの奴等が急にニヤニヤと笑い出した・・・

「ぶーーーーー」

エリゴールが時間切れの合図を言った・・・

コッソ

エリゴールは駅には必ずあるものを叩いた・・・

それは、なんと・・・

スピーカーだった！

「呪歌ラバイを放送するつもりか！！！！？」

「え！！？」

「何だと！！？」

「・・・！！！！！」

「ふははははっ！！！！」

この駅の周辺には何百・何千の野次馬どもがあつまってる・・・いや音量を上げれば町中に響くかな・・・死のメロディが！」

「大量無差別殺人だっ！！！！！」

「これは粛清なのだ。権利を奪われた者の存在を知らずに、権利を掲げて生活を保全している愚か者どもへのな。この不公平な世界を知らずに生きるのは罪だ。よって死神が罰を与えにきたのだ。『死』という名の罰をな！」

「そんなことしたって権利は戻ってこないのよ！
てゆーか、もともと自分達が悪いってのに呆れた人たちね」

「ここまで来たら欲しいのは『権利』じゃない『権力』だ。権力があれば全ての過去を洗い流し未来を支配する事だって出来る」

「アンタバツカじゃないの!!」

「残念だったな妖精ども！」

「!!!!この声!!!」

「闇の時代を見ることがなく死んじまうとはな!!」

カゲはルーシイに向けて魔法攻撃をしようとしていた

「きゃあ！」

「し、しまった！」

まあたぶんアイツが復活するからルーシイは大丈夫だな・・・

「やっぱりお前かアアアアア!!!!」

するとナツはカゲの魔法を殴ってぶち壊してしまった

「てめえ・・・」

「復活！」

やっぱり大丈夫だったな・・さすが火竜^{サラマンダー}！

「今度は地上戦だな！！！」

ん？なんかいっぱいいるぞ！」

「敵よ敵！みんな敵！！」

皆には見えなかったらしいが俺はこのときエリゴールが笑っていた・
・・・ようにみえた

本日、2度目の笑いだ

第21話 鉄の森《アイゼンヴァルト》の目的（後書き）

今回ちょっと長かった気がします。

次回はきっとアイゼンヴァルトと戦うことになると思います

では、

第22話 嘘をつく顔に出るとか言うけど、あれ本当なの？ (前書き)

はい、また更新遅れました・・・すみません
それに短いです・・・すみません

今回の後書きはチェックしてください。

「うん、アイゼンヴァルトってさつき駅のスピーカーでララバイを放送して、大量無差別殺人をするって言ってたじゃん？」

「ああ、確かに言っていたな」

「でも、もしエリゴールがララバイを放送したとしたら、俺たち・
フェアリーテイル・妖精の尻尾だけ・アイゼンヴァルト・鉄の森の奴等も呪殺されちゃう
よね？さすがにエリゴールでも仲間も皆殺しするわけもないし・
それで、おかしくない？って言ったんだ」

『！！！！！！！』

おおお！皆、メツチャびっくりした顔してるよ！！

でもナツは意味が分からないっていうような顔をしてるな・
まあそりゃバカだもんな、ナツは

「・・・あ、後は任せたぞ。お、俺は笛を吹きに行く！」

エリゴール、メツチャ焦ってるじゃんか・
やっぱりここではララバイは使わないのか？だとしたら一体何処で

ララバイを使うんだろうか・・

ガシャアン

するとエリゴールは近くの窓から何処かへ逃げていった

「逃げるのかっ！エリゴール」

「くそっ！向こうのブロックか！？」

「ナツ！グレイ！二人で奴を追うんだ！！」

ハァー！！？何でよりによって、この仲の悪い二人何だよエルザ！こいつ等だと、エリゴール追いかけながらケンカするだろ！・・・多分。

けどコイツ等、仲が悪い分何か息が合うからな・・・この二人なら余裕でエリゴール倒せるだろうな。

ふと、ナツとグレイがいた方を見るとこれまた、互いに睨み合いだよ・・・

「ここは私とルーシィ・・・あとライトで、何とかする」

「まあ、ライトがいれば安心そうね・・・」

「ルーシィ、自分の身は自分で守らなきゃダメだぞ。」

もしかしたら俺がやられちゃう可能性だってないこともないんだぞ」

「ま、まっさかそんなことあるわけないじゃん」

「・・・ちゃんとルーシィも戦ってほしいんだよ・・・わかってくれよ」

俺は今日、本当は家でゴロリ、ゴロリと自由に過ごすつもりだったんだよ・・・なのにエルザと一緒に来いとか、何とか言うから・・・・・・もう本音言うと帰りたい・・・

「エリゴールはこの駅で呪歌フラバイを使おうとして・・・いるのか？まあいい・・・とにかくフラバイを使わせることは何としても阻止しなければならぬ」

あゝあ、ナツとグレイ、睨み合いに集中しててエルザの話全く聞いてないや、

このままだとエルザが怒・・

「聞いているのかっ!!」

「も・・・もっちらんでっすっ!!!!」

・・ったか、こいつ等いつもエルザに怒られてるような気がする
まあバカだからな、ナツとグレイは

「行って来い!!」

「「あいさー」」

あいつ等仲が良いのか、悪いのか、わかんねえよ・・・

「おい、二人逃げたぞ」

「エリゴールさんを追う気か？」

「まかせな。俺が仕留めてくる！」

すると男は魔法で、手から黒い紐のようなものを出して上の階の手すりに絡ませ、2階へ消えていった。

「こっちも！あの桜頭さくらあたまだけはゆるせねえ！！」

カゲと呼ばれる男も魔法で自分の影の中に沈み、何処かへ消えていった。おそらく転移魔法だろう。

あの転移魔法、羨ましいうらやいな……俺も使ってみたい

「あらあら、レイユールとカゲは好戦的だのう」

レイユール？……ああ、最初に追いかけていった奴か

「あんなの放っておいて、お姉ちゃんたちと遊んだほうが楽しいだろうに……」

「作戦の為だよ。お前よりずっと偉いさ」

「それより、あの色男が邪魔だな・・・さっさと、あの男の方倒してお姉ちゃん達と遊ぼうぜエ」

あらら・・・アイゼンヴァルトの人たちはエロいこと考えちゃってんのかなア？エルザが・・・エルザさまが怒るぞオ・・・

「こいつ等を片付けたら私達もすぐに追うぞ」

「うん」「あいさー」

「はぁーっ・・・めんどくせえなア・・・とっとと片付けて帰ろ」

「それにしても二人ともいい女だなあゝゝ」

「殺すには惜しいぜ」

「とっ捕まえて売っちまおうぜ」

「待て待て、妖精の脱衣ショー見てからだゝ♪」

『ひやははははっ！』

「下劣な・・・これ以上妖精の尻尾を侮辱してみろ。貴様等の明日は約束できんぞ」

するとエルザは剣をだした。いわゆる換装って魔法ね・・・

「おお、さすがエルザ。よくこんな状態でも冷静でいられるね・・・」

「そういうライトも冷静じゃないの」

「いいや・・・」

「その冷静な口調で『冷静じゃない』といわれても・・・」

「・・・俺たちのギルド、妖精の尻尾をアイゼンヴァルトの奴等はバカにした・・・。それに、鉄の森の奴等は、関係のない人たち・・・外にいる野次馬達に呪歌を放送して、大量無差別殺人をしようとしているのかもしれない・・・。そんなことを許せるか？」

「・・・」

「・・・」

「俺はもうガマンの限界だ・・・あいつ等を全員ぶっ飛ばす!!」
アイゼンヴァルト

第22話 嘘をつく顔に出るとか言うけど、あれ本当なの？（後書き）

変なところで終わってしまったて・・・

本当はもうちょつと書こうと思ってたんですけど、なんだか、書けなくなってしまうて・・・

実はあと2週間後ぐらいにテストです。なので僕は勉強をしなくてはなりません。

もう受験も近かったりするので、そろそろまじめにやらんとアカンと・・・

はい、なので一旦更新を停止させていただきます。申し訳ありません。

けど、出来れば2週間のうちどこかで更新をしたいと思っています。

では、また・・・

第23話 カッコつけようとするそれは大体失敗する（前書き）

どうも～お久しぶりです！

やっと復活しました！ やっと更新できた！ バンザーイ！！

でわ、本文どうぞ！

第23話 カッコつけようとするとそれは大体失敗する

「俺はもうガマンの限界だ．．．あいつ等を全員ぶっ飛ばす！！」
アイゼンヴァルト

そう言い切ると、俺は木刀をだした。もちろん奴等をたたっ斬る為にだ

「あゝあ、ライトがキレちゃった。もうあいつ等終わったね」
「お、終わるって何が．．？」

「それはアレだよ．．．．人生が終わるんだよ」

「な、何それっ！死ぬって意味じゃない！！」

は、ハッピーさすがに俺はそこまではしないよ．．．．。
俺がそんなことをしてしまったら俺、殺人犯になっちまう。

気絶させるだけだよ、奴等をね。

「ら、ライト……お前アイツ等を殺そうとしているのか？それじゃやつらと「ちげーよ！俺はただ奴等をこの木刀で気絶させるだけだよ！お前等全員勘違いしてんじゃねえ！」……そうか、まあライトがそんなことする訳がないか」

「よかったあゝいつものライトに戻ったよ」

「あ？その為にそんなこと言ったのかよ！お前、前回から結構かっこいいムードが続いてたじゃんかよ！それをお前、台無しにしたのかっ！！？」

「あい、でもオイラはこっちのライトの方がいいと思う」

「別によかねえよ！」

「いや、でもあたしはかっこいいライトもいいと思うよ（現にさっきのライトちよっとかっこよかったし／＼／＼）」

る、ルーシィ……！君は唯一の理解者だ！うん、今度何か奢おこってあげよう♪

「わ、わたしもかっこいいライトはいいと思うぞ！」

おお！なんとエルザまでもか！！エルザにも帰ったらケーキ奢ってやろう♪

あ、でも今回の仕事終わったらエルザと一緒に、ケーキた〜くさん食えるのか。

じゃあ何か他の物を買ってやるか！

そんな話を俺たちは敵の目の前で話していた。

そしてとうとう、奴等が怒った

「ゴチャゴチャとうるさい妖精^{ハエ}どもだ！！やっちまうぞ！！！！」

「やっちまったらダメだろ！先^まずは妖精の脱衣ショーを見てから・・・」

「もうその話は良いだろっ！！！！とにかく行くぞオオ！！！！」

『オオオオオオオ！！！！』

アイゼンヴァルト

鉄の森の大きな声と同時に奴等の数人がこちらに向かってきた

「わっ！あいつ等来たよ！！」

「む、行くぞライト！」

「ああ！言われなくても」

そして、俺たちもあいつ等のところへ向かって行く
もちろん敵が多いから、二手に分かれて戦いに行く

「へ！たった二人で何が出来るんだ！！こっちは50人近く・・・
いやそれ以上はいるんだぞ！お前等に勝ち目はねえんだよ！！！」

えゝ50人近くもいるのかよオ・・・めんどくせえ
だけど、

「そっちのギルド・・・いや闇ギルドがどのくらい強いかは知らねエ
が、オメエらの魔力量で考えるとたった50人程度じゃ、俺たちは
止められねえぞ！！」

「その自信、どっから湧いてくるのかは知らねエがなア・・・そんな
木刀なんかじゃ俺たちは殺れねえよ！！んなモンへし折ってやる
！！！！」

そんな会話を奴等としている間に奴等アイゼンヴァルトの目の前に来てしまった

「だ・か・ら！俺は殺す気は・・・ねえつつてんだろオオオが
アアアアア！！！！」

ブオンッ！「ぐはっ！」「ぶべっ」

叫ぶと同時に、俺はさっきまで走りながら喋っていた奴等2人を思
いっきり木刀で斬った。

と、言っても斬刀化はしてないから、ただの木刀のまんま斬ったん
だけだね。

「ちィ！たった2人倒したぐれェで調子乗ってんじゃね・・・え・
・！」

ブオン！「ぐはぁ！」

「はーい、ごみ掃除中は私語を慎むように！じゃないと先生、怒っ
ちやいますよオ？」

「てめえ！どう考えても先生って年齢じゃねえだろ！」

「ごみって俺等のことか！？俺等のことなんだろ！！」

「そんなギャグじゃこの小説を見てる人は笑ってくれねえよバーカ
！」

ブン ブオン！「ぎゃーっ！」「ぐふう！」「うがっ！」

「私語は慎むようにって言っただろうが……。ごみはゴミ箱に・
逝かなきゃダメだろオオ!!」

ブオン!! 「」「」「ぐはあっ!!」「」「」

「『逝かなきゃ』ってお前、やっぱり俺等のこと殺そうとしてんじやねえのか!!?」

「…………間違えたんだよコノヤロオオ!!」

「」「ギヤアアア!!!!」「」

ふう…………俺の方はだいぶ敵が減ってきたかな? エルザの方は
どうだろう?

チラリッとエルザの戦ってる方を見ると、

ズババババン!

っと言わんとばかりに、エルザは敵を斬って、斬って、斬りまくっ

てた

いや、ズギヤギヤギヤン！の方かもしれないな

「チィ！遠距離魔法でも食らえっ！！」

「！！！！」

するとエルザは瞬時に剣から槍に持ち替え、

「なっ！」

バキイイイ「おごっ！」

そいつをぶっ倒した！

あゝあ、せめて『遠距離魔法でも食らえっ！！』なんて言わなかったら倒せたかも知れないのに・・・残念！

「てめえ！余所見なんかしてんじゃねえ！！！！」

「うるせェ！今いいところなんだよ！！」

ブン！「あぎゃっ！」

チィ！また俺の方の敵が増えたな・・・

んで、なんで俺の方はエルザの方より敵が少ないんだろう？やっばりアレか？まだ『妖精の脱衣ショー』とか狙ってんのかな？あいつ等、

まあいいや、とつと片付けて帰ろう！ギルドへ！

第23話 カッコつけようとするとそれは大体失敗する（後書き）

いやゝ久しぶりの更新で興奮しちゃいましたねえゝ……

と言っても、そんなに書いてませんけどね。

えゝ受験が近い？のかな？……なので、これからは少し更新が遅れる可能性があります。

けど、俺の頑張り次第で、全然更新が遅れることはないと思うんですが。

そういえば『急に初めての活動報告』で書きましたが、ユーザー名を変えました！

名前は『白黒』ですっ！

うん、これも思いつきの名前です。

では、このへんで……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8101v/>

FAIRY TAIL～光と闇の魔導士～

2011年11月26日23時40分発行